

---

## 【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

### 【Nコード】

N8175K

### 【作者名】

【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

### 【あらすじ】

千人単位で異世界トリッパーが在住し、平穏な暮らしを築いている世界。けれど『最強系逆ハーレム少女』が遣ってくると言ふ不穏な未来が予見され、そんな日常にも影が指す。これを憂えたトリッパー一同はそんな未来を回避すべく、国家を一つ巻き込んで『心の伴わない演技による、逆ハーレム状態の形成』を企てた。けれど、それは名づけられた名称の所為で、次第にお祭り騒ぎに発展し…？ 異世界の『祭典』に、関わったり妨害したり見守ったり参戦して、泣いたり笑ったりする人々を、複数の参加者が様々な視点から描く

短編小説投稿企画に寄せられた作品をまとめました。【企画サイト】  
<http://maturikikaku.web.fc2.co.jp/>

## Prologue 不思議の国のお祭り事情は、この上も無く残酷でした

未来視たちが一齐に、その未来を予見したのは、とあるうらかな春の日の午後だった。

少年はその未来を認識した途端、あまりの事態にさあっと顔を青ざめさせた。

女は「これ何の黒歴史よ!？」と、くつろいでいたカフェで咄嗟に叫んでしまい、畑仕事に精を出していた老人は、視てしまったその信じがたい未来に思わず硬直した。

大陸中の未来視がそれを視たのだ。彼らの総本山であるリーゼンフォード一族の本家に、その日のうちに連絡が行ったのは当然の事である。

翌日には未来視たちの予見した未来は、報告を受けたリーゼンフォード家の人間によって書類に纏められた。そして即座に一族の長老達の間で審議にかけられる。

けれど一族と同類らしき少女が大きく関わっているだろうその未来は、小さくはあったが一国をも巻き込んでいるように見受けられた。下手をすれば国際問題に発展しかねないこの件は大いに彼らを悩ませ、また消耗させた。

同時に予見されたその突飛な未来の噂は、人伝に大陸中を駆け巡る。

友人から聞いた話を、宿屋の主人が旅人に伝え。

母が零していた愚痴を、子供が文通相手に面白おかしく書いて送る。

小耳に挟んだ噂話を、調べた記者は記事にまでして、こうして情報に驚くべき速さで世界に伝達された。

何しろ、予見された未来は奇抜でありえなさ過ぎたのだ。そして、

実現したら本気で嫌だと思える内容だった。

冗談交じりに語られる事もあれば、真剣な話題として取り上げられる事もあり。

リーゼンフォードの一族がこの予見された未来について、各国の重鎮を正式に招いて話し合う場を設ける事を決めた頃。その噂について知らない者は、殆ど居ないほどであった。

さて、そう言う訳で興味津々の国民達が見守る中、会談はディリトリシアの王都で開かれる事となった。

最大の当事者であるリーゼンフォード一族の、本家が籍を置くのがこの国であったと言うのもある。しかし最大の理由は、噂を聞いた王国の重鎮が、真っ先に名乗り出たと言う事だ。

「そんな面白い事を話し合うのであれば、是非我が国にて行ってもらえないか」と。

一概にただ面白いだけとは言えないだろうその未来。それに、リーゼンフォード一族の次に密接に関わってくるのは、ディリトリシア王国であると目されている。だと言うのに満面の笑みで、金髪の使者はそう言ったのだ。

「それではまず、問題とされている『リーゼンフォード一族の未来視が予見した未来』について説明させていただきます」

さて、そして開かれた会談の当日。早々に黒髪の司会者が発言すると、少しばかりざわついていた会談の場は水を打ったように静まり返った。

未来視が一齐に予見をした日から、既に一月が経過している。

『とんでもない未来の噂』を、今集まっている人々も一度は耳にしていた。

「問題の未来が予知されたのは先月、四月二十二日の午後三時頃です。予見した未来視はリーゼンフォード一族に属する来訪者の内、未来予知能力を持つ全ての人間であると確認が取れました。詳しくは、お手元の資料をご覧ください」

紙の擦れる音があちらこちらで響いた。

この世界には、ごく当たり前のように異世界からやってきた渡来してきた人々が存在し、受け入れられ、暮らしている。

この未来視を初めとした、様々な異能を持っているのも彼らだけだ。

そんな来訪者と呼ばれる、異世界からやってきた　もしくはやっつてこさせられた人々の殆どが属しているのが、リーゼンフォード一族である。大抵の来訪者は、最初は保護される形でこの一族に参入してきている。そしてこの世界に馴染むにつれて、彼らは今度は新たにやってくる同類を保護していく側になるのだ。

リーゼンフォード一族とは古くから、時に様々な役立つ知識や技術や異能をもつてして、世界に利益をもたらす異世界からの来訪者の代名詞に等しい。

様々な理由で、各国で重宝されている隣人が予見した未来だ。彼らがこの世界に由来する出自ではないからと言って、無碍にしたりする事などできなかった。

殆どの参加者が真剣に資料に目を通しているのを確認すると、司会者の青年は黒色の瞳を一度瞬かせてから言葉を続けた。

「さて、問題の未来の内容についてですが、寄せられた報告を簡潔にまとめますと、次のようになります。『所謂空想上典型的来訪者のように見受けられる少女が、リーゼンフォード一族当代当主、デイトリシア王国第一王子殿下を始めとした、複数の男性を周囲に侍らせていた。彼女は実際には良吏である幾人かの実在する官吏と思しき人々を奸臣、佞臣として、聖女である己は神からの宣旨を聞いたなどとの発言をしながら失脚を指示していた。また、魔物と思しき生物に対して強烈な光を浴びせ、一瞬にして消し去るなどの異能を得ているようにも見受けられた』、以上です。正確な証言は会談の通知の折に送付いたしました資料に記されていますので、後ほどご確認ください」

来訪者の多くは、あまりに強大すぎる異能を持っているわけではない。仮に持っていたとしても、強すぎる力は害になりやすいのだ。

世界に害いなされる事を畏れた、世界の意思と呼ばれる神に等しい存在によって、この世界では使えなくなっている事が多いとされている。

だからこそ、だろうか。まとめられた説明の内容に、多くの参加者が驚いたようなそぶりを見せた。

示された予見の内容は、現実にはありえないだろう、と言うか正直ありえて欲しく無い内容だった。

予見された『複数の男性を侍らせ、己を聖女だと発言する少女』が、空想上典型的来訪者と呼ばれている事からしてそうである。

空想上典型的来訪者とは、『世界の順調な発展を著しく阻害するほどに、大きな力を持った来訪者』であつたり、『国家の上層部に関われば、一国の政治を崩壊させかねないほどに異常に他人に好かれやすい来訪者』などと言った、現実には決して存在しない、空想小説などでよく見られる種類の来訪者を指して言う。

だからこそ、そんな未来が予知された事に人々は有りえない、馬鹿馬鹿しいと笑い、同時に外れる事の無い予見に本気で未来を危惧したのだ。

空想上典型的来訪者と呼ばれる類の人物は、創作上でこそ好ましく感じるだろう。

けれど実際に存在すれば、望むと望まないに関わらず、彼もしくは彼女の周囲の人間関係や生活は脆く崩れるだろう。大きすぎる力や効果とは、得てしてそう言うものである。

加えて、問題の未来では空想上典型的来訪者と思しき少女は、権力者の側に居たとされている。

国家の上層部の人間の大半が一人の人間に傾倒したり、国民がただ一人に頼りきってしまうなど。

そんな事態、下手をすれば国すら傾きかねないではないか。

一国であつても国が傾けば、その余波は大きい。そう言う訳で未来の実現は、渦中のリーゼンフォード一族、王子が関わっているらしいディリトリシア王国のみならず、近隣諸国にとっても望ましい

事ではなかった。心情的な問題だけではなく、政治的経済的な観点から見ても、だ。

「……確認しますが、リーゼンフォード殿。この未来は、回避する事は不可能なのですか？」

資料を見つめていた、ルティア公国からの代表者が聞いてきた。

来訪者は多少の例外はあるものの、皆がリーゼンフォード姓だ。

この場には来訪者である人間も多く参加していたので、少しばかり誰が答えたものかと言う戸惑いの空気が流れた。

しかし一族の当主であるクラウディオ・リーゼンフォード発言したため、それもすぐに霧散する。

二十代のはじめと見受けられる彼は、しかし纏う雰囲気こそ老獪なものであった。視線だけで空気を収め、おもむろに口を開く。

「不可能ですな。凡そ百名の予見者<sup>およ</sup>が、場面は違えど共通した未来を見たとなれば……どう転んでも、これは確実に現実となる未来でしょう」

「回避は不可能、と？」

「いいえ、ある意味では可能かと」

大きく場がざわめいた。

クラウディオは軽く微笑して「お手元の資料の、第十二頁ご覧下さい」と、よく通る声で言った。

またあちらこちらから紙をめくる音が聞こえてくる。けれど今度はそれもすぐに止み、代わって一度は止んだざわめきがまた大きくなった。

訝しげに眉をひそめる者も居れば、興味深げに資料を読み込んでいく者も居る。

クラウディオは軽く彼らに視線を遣って、再び口を開いた。

「これは我が一族の一員である、カナデ・リーゼンフォードと言う女性によって発案されましたものを、リーゼンフォード一族が綿密なものとした計画です。呼称を、『祭典計画』と。……説明を頼む」  
軽く彼が言うと、司会を務める青年が言葉を引き継いだ。



「まず、この計画を一言で言ってしましますと、『実現が好ましくない未来を本当の意味で実現させないため、期間を決めて演技によって実現させればよいのでは』と言う事です。予見された場面をどのような形であれ実現させてしまえば、覆せない未来は本当の意味では回避できるのですから。しかし全てが完全に演技であると、逆に矛盾も生じかねない点があります。ですから問題の空想上典型的来訪者と思しき少女については、然るべき時期にこの世界へ渡来してきた適当な来訪者に、『あなたは聖女である』等といった知識を与えて仕立て上げるなどの措置をとるべきかと思われます。ただしこれについては人権などの問題から、審議を重ねる必要があるでしょうが……。尚、内々に打診しました所、問題の空想上典型的来訪者らしき少女と共に居る所を予見された方の幾人かには、既にご協力いただけるとの回答を頂ました事を報告させていただきます」

そこまで言い切った所で、興味津々と言ったように資料をくまなく読み込んでいた、ディリトリシアの代表がぱつと顔を上げた。

未来視の件で全権を委任されているこの外交官の他にも、この会談の会場を提供したディリトリシアからは、第一王子アルフレートを始めとする数名の政財界の重鎮達が参加している。彼らもまたわくわくとした子供のような表情で、資料に目を通していた。

「祭りですか！面白そうですね。ディリトリシアとしては、是非この計画を実現させたいのですけれど？」

彼に賛同するように、ディリトリシア王国からの出席者は皆、それぞれ笑みを湛えて首肯した。ついでに王子に至っては、輝かしいばかりの笑みと共に、堂々とこぶしを握って親指を立てた。

さすが、祭典民族とすら称されるほどに祭りを好むディリトリシアだ。祭典と名の付く計画ではあるし、興味は持つだろうとは思ってはいた。また、はたから見分にはある意味面白そうな事態ではある。けれども想像以上の即決だった。

予想以上の反応に、クラウドディオもまた軽く驚く。

それに続くかのように、周辺の国家からの参加者達も「いいです

な、我らへの実害もさほどなさそうですし」「むしろ、ある意味での本当に祭典とすれば、経済効果も見込めそうですね」と、口々に賛成の言葉を口にする。想像上典型的来訪者に仕立て上げられるであろう来訪者の心配をする者は少ない。自国の民が良ければある程度は仕方ないといったほどに、彼らの殆どはえてして性格が悪かった。

幾人か問題点を指摘する者も居たが、その後続いた長々とした協議の結果、その程度ならばどうにかできる、むしろ本当の意味でこの未来を実現させてしまう方が拙い、と言う結論に達する。

最大の問題点であった、『祭り上げる少女の人権問題』は結局はその場では流された。

また『祭典計画を実行する場所』をどうするかと言う問題も、デイトリシアの王子が嬉々として「それなら、我が国の領土内に限定させて実行しましょう」と名乗り出た事であつさりと決定された。尚、会談の終了後にこの計画が審議の後に一般に公表された時には、祭りを何より好むデイトリシア国民が大いに沸いた事を記しておこう。

かくして、デイトリシア王国では近隣諸国を巻き込んで、王家とリーゼンフォード一族の主導の下、祭りの準備が進んでいった。それはいずれ訪れ、いわば『好ましくない未来を回避するための、ある種の生贄』として祭り上げられるだろう来訪者の少女にとっては、酷く残酷な祭りであつた。

祭典計画の展開される期間は、しかるべき来訪者の渡来より一年間。その間に予見された全ての事柄を演じきらせてしまう必要がある。

空想上典型的来訪者として祭り上げられる少女は、『己は聖女であり、多くの人に敬われ、見目麗しい男性にかしずかれる』と言う、ある種の夢のようでもある一年間の後に、『それらは全て虚構であつた』との現実を突きつけられるのだから。

けれど人々は来訪者一人の安寧よりも、一時の祭りと安全な未来

を選んだ。

人を無残に食らう魔物が蔓延り、世界を渡らせられたことによつて理不尽に、居場所や大切なものを奪われた来訪者達が、数え切れないほどに身近に存在するこの世界。

人々は、己の大切なものを守るために、無情であつても何かを切り捨てる事を知っていた。

そして、未来視達による一斉の予見より、およそ一年後。

新芽の芽吹く春の終わりに、その少女は一人渡来してきた。

黒い瞳に、黒い髪の少女。その存在をいち早く察知した祭典計画の担当者は、突然の事に驚いて呆然としている少女の下に、『あなたは聖女である』と告げる役目である、この世界には存在しない『神』の演じ手を派遣した。

同時に彼らはディリトリシア王国へ使者を飛ばし、祭典計画の最高責任者であるリーゼンフォード一族当主、クラウド・ディオ・リーゼンフォードにその事を告げ知らせた。

そして、一時間の内に彼はディリトリシア国王に謁見し、祭典計画の開始を報告。

かくして。近隣諸国をも巻き込んだ、国を挙げての大祭である、その祭典は開始されたのだ。

**P r o l o g u e** 不思議の国のお祭り事情は、この上も無く残酷でした（後書

作者：篠崎伊織

同作者の同名の短編連作より転載

## 祭典の準備を始める王宮には、三人の勇ましい将軍がいた

「祭典などばかばかしすぎる。この国の人間はのんきすぎるんだ。なぜこんなことを国全体でやらなければならない」

ディリトリシアの王宮の中庭を、二人の男が歩いていた。一人は短く刈りそろえた黒い髪に青の瞳の男。もう一人はうなじでくくった長い金の髪に緑の瞳の男。どちらも細身だが鍛えてあることの分かる体つきをしていた。

この二人はこの国の軍のトップ、三大将軍のうちの二人だった。

黒髪の男はアルトゥール・ボーデンシャツツ、金髪の男はホラント・ベルクと言う。

年齢はあるトゥールが23歳、ホラントがひとつ上。将軍と呼ぶにはまだまだ若すぎる者たちだった。

それもそのはず、彼らはほんの数日前に将軍になったばかりからだ。

もともと軍の中でも特に強く、リーダーシップのある彼らはいつか將軍になるだろう、といわれていた。だが、あくまでもいつかであって、それがいきなり決まったのは『生贄』の影響だった。

『複数の男をはべらせる聖女も、ジジイをはべらせるのはいやじゃろうからなあ！はっはっはっ！』

といって前の將軍たちはそろって引退。はっきり言う『見てる分にはいいが、参加するのはいろいろめんどくさいから若いもんに任せよう！』といった感じじゃないかとアルトゥールは考えている。

ただ、これはお祭り嫌いのアルトゥールにとっては迷惑でしかなかったが。

「いいじゃないか、皆が賛成してるわけだし。君のように反対して

る人間のほうが少ないよ?」

ホラントがいうと、アルトウールは鼻を鳴らした。

「ふん、俺が間違ってるって言いたいのか? 大体、国全体が浮ついている間に隣国が攻め込んで来たらどうするんだ」

「大丈夫だよ。君が警戒していれば安心だろうし」

「お前ものんきすぎる。將軍に昇進したんだから少しは警戒しろ」  
そっぴいながらアルトウールは食堂の扉を開け……

開けて……頭を抱えた。

「お前ら何をしている!!」

「いや、祭典の前祝い? 將軍も一杯どうです?」

食堂では、兵隊たちが手に酒を持って騒いでいた。

「祭典が始まったからって騒ぐな! 逆に気を引き締める! 全員配置に戻れ!」

アルトウールの鋭い声が食堂を走る。その声でうるさかった食堂が静まり返る。

が、

「いや、みんな騒いでてよし!」

元の配置に戻ろうと兵が立ち上がったとき、食堂の奥から声がかかる。

「レオンハルト將軍!」

「アルトウールのいうことなんか気にしないでいいぜ。あいつの言うことばっかきいてると疲れきっちゃう」

そういったのは赤毛の男、レオンハルト・バルシュミーデだった。

アルトウールたちと同じくまだ若く、一見將軍には見えない男だが、彼が三大將軍の最後の一人だった。

「レオ、お前……」

「よ、堅物男。どうせなら今日は思いっきり騒ごうぜ? 明日からは忙しいんだよ」

レオンハルトの顔を見ただけでアルトウールの眉間のしわが三割り増しになっている。

「……そんなこと、許せると思っているのか貴様!!」

「いいじゃんか、いいじゃんか。さ、お前さんも一杯どうよ」

「いるか!ふざけるな!將軍の自覚を持て!」

「怒ってばかりだと血圧上がるぞ。あ、ぶどう酒のほうがいい?」

「だからいらん!!」

はあー、とため息をつくとしオンハルトがにやりと笑っていた。

「俺に勝負に勝ったら真面目に働いてやるぜ?」

「何の勝負だ。ポーカーか?チェスか?それとも剣か?」

アルトゥールの問いにレオンハルトは何も言わずに酒瓶を目の前に押し出す。

「……酒か?」

「俺さ、お前と一回勝負してみたかったんだよ。何せお前、すぐに部屋に引ッ込んでしまつてめつたに酒飲まねえからな。どうだ、やるか?」

アルトゥールは眉間にしわを寄せ酒瓶をにらんでいたが、やがて「受けよう」といった。

「よっしゃ!お前ら、酒を山ほどもつてこい!」

「本当に俺が勝つたらしつかり働くんだな?本当だな?」

「男に二言はねえ!さあ、今夜は飲みまくるぜえ!!」

こうして、王宮では王宮全体の兵が集まつた大きな宴会が行われた。

「おい、生贄があと二時間で来るから早く準備……おい、生きてるか?」

「うるさい、怒鳴るな、頭に響く……」

翌日の午前九時、生贄が来る二時間前に王宮中の兵があわただしく走り回っていた。

昨日の宴会で飲みすぎた兵は、頭を抱えながらよろよろと走り回っている。

その中でもアルトゥールは特に重症らしく、ホラントの肩を借りながら歩いていた。

「さすがに休んでたほうがいいんじゃない？無理しないほうが……」  
「……将たるものが休むわけには行かない……」

そういつているものの、その顔は青白くやつれている。

「いやー、お前があそこまで酒に弱いとはな。ついつい飲ませすぎちまったぜ」

「うるさい！そもそも祭典前に宴会など……っ」

怒鳴ったせいで頭に響いたらしく、また頭を抑える。

「俺の代わりにジジイどもを恨め。こんなに忙しいのも俺が宴会したがるのもすべてジジイのせいだ」

「確かにな」

前の將軍たちはこぞって宴会好きかつめんどくさがりで、面倒なこととはすべてこの三人に押し付けるのが普通だった。

「あと二時間休憩しているかい？」

「……いや、そんな暇はない」

そう言うのとふらふらと中庭の井戸へと歩いていった。水を飲んですつきりしようということらしい。

「さてと、まじめに準備しなきゃね」

そう言うのとホラント頭を抱えている兵たちに号令をかける。

「昨日酒を飲んだものは水でもかぶって酒のにおいをぬいてこい！魔術師は来てるか？すぐに集める！適当に神秘的な雰囲気を出しておけ！っておけ！すべて終わったら正装して大広間に集合！！」

「は、はい！」

いつもは優しい印象のホラントだが、祭典の号令をかけるときは厳しい。これは、どうせやるなら徹底的にやるといふ彼の方針に基づいている。

「お前ら、生贄の部屋はちゃんと準備できてるか？」

「はい、ご覧になりますか？」

「あー、見てる暇はねえがしっかりできてんだな。あと、どうせな



ら鳥使いも準備させとけ。伝書用の鳥で歓迎させたらいい雰囲気が出るんじゃないか？」

「分かりました。呼んでおきます」

「間に合わないようなら無理にやらなくていいって伝えとけ」

そこらを歩いていた侍女にレオンハルトがそう伝える。

「こんなもんでいかな」

「後は俺たちだけだろ。おい、アルトウール元気になったか？」

まだ井戸の辺りにいたあるトウールに声をかけると

「大丈夫だ」

という声が返ってきた。

その言葉どおり、顔色もかなりよくなっている。

「んじゃ、俺らも行くぞ」

「分かった」

そう言くと、彼らは大広間に向かって歩き出した。

祭典の準備を始める王宮には、三人の勇ましい將軍がいた（後書き）

作者：柳リヨウ

かくして我らは今日、神聖にして侵さざるべきであつた神を騙る

「衣装画の下絵、こんな感じでいいですかね？」

茶色の髪に青い瞳。まだ年若い青年が数枚の紙を提示すると、近くで言い争ったり作業をしたりしていた人々が、一斉にそれに群がってきた。

描かれているのは、たつぷりとした薄布を幾枚も重ねて纏う、独特の衣服の図案だった。意匠の元になっているのは、青い目の青年セイルデイト・リーゼンフォードの故郷で信奉されていた、唯一神の装束だ。

流石にそのままそっくり同じようにとはいかないので、記された意匠はその神の装束とされていた衣服と、この世界の服飾と多少融合させたものだった。

「へえー、セディ君の所の『神』ってこんななの？綺麗だねー。作りがいがあるわ」

「だな。俺の世界の神は、何か孔雀みたいに綺羅綺羅の派手派手だったぞ？」

「本当！どれも私にふさわしい服装ねっ！」

きやらきやらと彼らがはしゃぐ中、女がふうわりと微笑してうきうきと言った途端、周囲の『神』役候補から抗議と主張の声が湧き上がる。

「や、『神』役はわしだから。お前じゃないから」

「君たち、何言ってるの？頭おかしい？『神』を演じるのはこのボクだよ？」

長く白い髭を生やした老人が言えば、まだ十代始めと見受けられる銀髪の少年が吐き捨てた。

「いいえ、『女神』を演じられるのなんて、私しか居ないわ　この、第三の瞳を持つ私しか……！」

「ちょ、厨二病痛い！　お願いだから俺の古傷えぐるような発言やめて！」

変わったところなど何もない己の額をすつと指でなぞって言ったのは、紅の瞳を持つ女。そんな彼女の言動に、黒目黒髪の舞台系の一人が、耳をふさいで叫んだ。

なんとも、混沌とした光景であった。

セディこと、セイルディートの描いた衣装画は、あちらこちらで奪い合われている。取り合いに混ざっていない幾人かの衣装係や舞台係、道具係の面々が何とかその場を取りまとめようとしているが、殆ど効果が上がっていなかった。中心となつて争奪に参戦している、現在正式に『神』役候補とされている面々は、数百人の『神』役希望者の中から勝ち上がってきた猛者だ。全員がそれはそれは個性的で、何より灰汁が強すぎる

これではそれぞれの服の意匠の説明も出来ないではないか。セイルディートは　軽くため息をつく　と、部屋の片隅に置いてあった椅子に座つて、事態の収束を待った。正に、触らぬ神に祟りなしである。

来訪者の一人であるとは言え、セイルディートは凡人である。この強烈過ぎる面々を纏められるはずがない。

祭典計画実行委員会、聖女擁立担当部署の『神』顕現係。

名前の通り、『聖女と祭り上げる予定の来訪者相手に、聖女であると告げる神を捏造する』事を任されている通称神係は、今日も今日とて騒然としていた。

祭典計画。それを正式名称とする祭りの協力者が募られたのは、三月ほど前の事である。

当時興味本位で公式資料を取り寄せたセイルディートが、書類に目を通し終えた瞬間、その場で祭りへの参加を即決したのは、ひとえに己の技能を生かしたかったからだ。

様々な部門に分かれている一般市民対象の参加枠の中に、衣装部門と言う、彼の心引かれた単語は有った。

祭典計画の開催が公布されたのはセイルディートがこの世界へと偶発渡来してきてしまつて、そろそろ三年が過ぎようとしていた時期だつた。

異世界からの渡来には、術式等によつて何モノかの故意ゆえに渡来してくる通常渡来、何の意思にも因らない偶発渡来、死後に精神を維持したまま出生という形で遣つてくる転生渡来、それ以外の特殊な例が当てはまる特殊渡来の四種類がある。

つまりセイルディートは、何の思惑にも関わらない純然たる事故で、この世界に遣つてきてしまつたのだ。

渡来してくる前、彼は故郷の世界で、帝国の学院に通つていた。そこで幼い頃からの夢　王室付きの裁縫師となる未来を叶えるべく、日夜研鑽に勤しんでいたのだ。唯一神の敬虔な信者であり、また神官であつた父は良い顔をしなかったが、母や姉妹はそんな彼の選んだ道を応援してくれていた。

けれど突然の渡来で、セイルディートの夢はあつてなく敗れた。まず故郷の世界とこの世界では、根本にある常識すら違つたからだ。神や魔法の存在の有無をはじめ、セイルディートの培つてきた認識は、この世界に来て大部分を変更せざるを得なかった。

それは、裁縫に関する認識も、だ。針と糸で布をつなぎ合わせて衣服を作る。それは幸いこの世界でも同じだつた。しかし、素材がまるで違つのである。イジェンの羽毛やカジャル製法の絹と言つても、この世界では通じない。そもそもそんなものは存在しない。そう言う事なのだ。

必死に詰め込んできた知識は、殆ど役に立たなかつた。そしてこの三年間近く、学院の生徒から出自が特殊なだけの一般市民となつた彼には、技術を生かす場も確保できていなかった。新たな生活に馴染み、文字や常識を覚えるので手一杯だつたのだ。

けれど、ここ最近生活にも余裕が出てきていた。それに何より

来訪者への配慮と援助が手厚い、渡来から三年の期限ももうすぐ切れる。自信を持って自立したかった。

職場である仕立て屋での仕事も、それほど忙しいものではなかったから、セイルディートはこの世界でも己が技術が生かせるかを知りたい機会だと思って、祭典の協力者の募集に応募した。

『聖女』と選ばれる来訪者は、望ましからぬ未来を回避するため一年間騙され続けると言う。つまりはある種の生贄として祭り上げられると聞いている。自分と同じように、不安がったり苦しんだり悩んだりするだろう時期に、そんな状態に陥る来訪者の事は少々気にかかった。けれど国家規模で動き出しているモノに、今更文句などとも言えまい。

さて。セイルディートがそう割り切って、自分の技術と経験を僅かでも生かそうと、公募の面接を受けた結果、彼は見事に希望の衣装担当者として採用された。

しかし、その後担当となった部署は、混沌極まりない『聖女擁立担当部署』であつたのだ。

およそ数百名の希望者を押しのけて、激戦を勝ち抜いてきた三人の『神』役候補と、それぞれ五人ずつ居る衣装係、舞台係、道具係そして彼らのまとめ役であり、雑用や事務作業を担当する二名。計二十名の『神』係は、この世界に存在しない『神』と言う存在を作り上げるのに適していると判断された者ばかりだ。

『神』役候補の三名も、容貌はそろって人間離れして麗しかったり、柔らかな母性に溢れていたり、威厳さえ感じさせるほどに静謐だったりと、それぞれが何処と無く『神』らしい特徴を備えている。内面はそもそも自ら熱烈に『神』たる事に志願し、競争者をばっさばっさとなぎ倒してきたほどであるから、別に神々しいわけではないが。

舞台係や道具係も、幾人かは神や神への信仰が存在する世界から渡来してきた来訪者だ。皆神話をはじめとした神に関わる文化に造詣が深い。勿論セイルディートも神官である父に、幼い頃は跡継ぎ

となるように育てられていた分、故郷の神殿文化にはかなり詳しくあった。そう、彼がこの神係に配属された理由は、その事も大きい。渡来前はひたすらに鬱陶しかった父の影響が、まさかこんな所で役に立つとは。

少しばかりの感傷と懷郷に浸りながら、セイルディートがぼんやりと「私が神よ！」だの、「違うねボクだよ。わかってないな、今時代はツンデレ系生意気少年神なんだよ？」だの、「ええい、老人に花を持たせつつぐほあっ」「おい、ジルクーダ爺さんの入れ歯が飛んだぞ！ 誰か拾え！」「嫌です」だのと言った言葉が飛びかうその騒動を見ていると、唐突に部屋の扉が開かれた。

響いた音はあまりに大きく、室内の騒ぎはぴたりとやんだ。

扉を開いた人物に、一斉に注目が集まる。扉の取っ手を掴んだまま息を切らし、栗色の髪を肩まで流している、黒い瞳の小柄な女へ。「シェイラさん、大丈夫？」

舞台係の四十代ほどの女が駆け寄って声をかけると、シェイラは荒い呼吸を繰り返しながら頷いた。この部屋まで走ってきたのだから、少しばかり髪も乱れている。

彼女は二名しかいない神係の事務員だ。はるばるリゼンシュトーザ王国から、この祭典の為に派遣されてきた、数十名の内の一人である。『神』顕現係の長であるのは、数十年ほど以前は神官として働いていた中年の男だ。彼 ライナー・リーゼンフォードは当然ながら来訪者であるから、均衡を保つ意味合いもかねて補佐にはシェイラが付いたのだ。

セイルディートも慌てて立ち上がると、わらわらと彼女の方へ集まる人々に倣った。基本的にこの部署は濃い人物が多いが、最初の打ち合わせの時点から仲間意識も強かった。

「あの、大変、なんです！」

呼吸も落ち着いてきたシェイラが、唐突に顔を上げて言った。

「どう言う事さ？ おねーさん？」

銀髪の『神』役候補の少年が、首をかしげてたずねると、彼女は

「それがですね」と、ゆつくりと深呼吸してから言った。

「来訪者 『聖女』たるべき『生贄』の来訪者の渡来時期が、予見されました」

「ほう……何時じゃ？」

「今から約三ヶ月後です。三月後の、五月の上旬だそうです」

ジルクーダ老の問いに答えたシェイラの言葉に、先程にも増して周囲からは様々な叫びが上がった。

舞台係や道具係の間では、「空間演出の術式構成間に合わねえ！」とか、「えええ、設計図もまだなんですけど!？」と、言った悲痛な思いが木霊した。

一方衣装係の面々は、即座に顔を突き合わせると、先程セイルディートが提出した衣装画の下絵を吟味し始めた。勿論セイルディートもそれに加わって、それぞれの意匠に解説を加える。が、次第に怒声交じりの意見交換となっていくので、かなり騒がしい。

一方、最も静かだったのは、先程まで場を引つ掻き回していた『神』役候補たちだった。「仕方あるまい、時間は限られておるしのおぬしら寄れい、妥協案じゃ」と言い放った老翁に手招きされて、なにやらこそこそと密談を始めたのは、シェイラが一人落ち着いている舞台係の女から、水を一杯貰って飲み干した頃。

この日を境に、割とのんびりと作業を進めていた神系の面々は、かなりの忙しさにあえぐ事となった。

何しろ、時間は残り三ヶ月しかない。しかも『神』を最初に顕現させるのは、『生贄』の来訪者の渡来直後なのだから、失敗や遅れは許されなかった。

さて、神係以外の他の部署も、その多忙さは同様だった。

『聖女』が滞在する予定のディリトリシアの王宮では、使われていなかった離宮の一つの内部の、大々的な改修工事が始まった。

国内外の学校では、祭典計画に関するお知らせが保護者と子供達に配られたし、計画の要を勤めるリーゼンフォードの本家でも、当主クラウディオを筆頭に祭典計画の業務に割かれる時間が大幅に増



えた。

ついでにディリトリシアの王都の商店街で、『各店連日限界まで大安売り！ 祭典開始まで生き残れるのはドコだ！？』などと言う、少しばかり経済的に危険な前夜祭が開催された為に、世の戦う主婦と主夫の皆様は歓喜した。

けれどそんな三ヶ月も、無常にも瞬く間に過ぎ去ってゆく。

『聖女』となるべき来訪者が渡来されると予測された、ディリトリシアの王都近郊の森の奥。

神系の面々は、記録装置やら防寒用具やらを完全装備して、朝靄漂う春先の森の、木の影やら枝葉の上やらで待機していた。

しかしながらあちらこちらへ隠れながらも、衣装系の面々は、『神』役の着付けの最後の直しに追われているし、道具係は舞台係と一緒にあって、最後の大仕掛けで忙しい。勿論『神』役も台本の見直しに集中しており、本当にのんびりと『聖女』の来訪を待っていない。それらは、事務員二人だけだった。

「ああ、ちよつと、あんまり歩き回らないで下さいね！？ 服に土が！ 裾に土が付く！」

セイルディートの『神』役に対しての叫びを聞きながら、シエイルはほう、ため息をついた。

「ライナーさん……とうとうここまで来ましたねえ」

「うん、来たねえ……あ、何か感動で涙出てきた」

「泣くのは成功してからにしてくださいねー。まあ、頑張りましたもんね、私たち」

「本当だよ。私も奥さんに、何度『残業は許さないって言ったでしょ！？』って怒られた事か」

リーゼンフォード一族の一員でもあり、故郷の世界では焔の神を信奉する神官でもあった彼は、今までの日々を懐かしむように言った。

ようやつと正式な神官と認められたばかりだった、十代の終わりに渡来してきた彼は、今回の祭典で『神』を捏造するのに、やはり

最初は抵抗があつたらしい。

けれど、この世界に神と言う存在はいない。在るのは、『世界の意思』と認識されている、ラグナーシャと呼ばれる唯一神に似た存在だけだ。

けれど様々な世界から、放り出されたり追い出されたり、零れ落ちてしまった人々を渡来と言う形でを受け入れているラグナーシャは、神ではない。それだけは確かで、明確な事実だった。

そんな世界で、数十年を生きてきたのだ。ライナーとて生粋のデイトリシア国民である妻とも結婚したし、子供も居る。いくら過去、多神教の内一柱の神の神官であつたとはいえ、彼の神に対する意識も、この世界での生活で大分変わってきていた。この仕事を引き受けたのは、だからこそ、でもある。

ライナーは諸々の支度を終え、本当の意味で待機態勢に入った部下達を見て、静かに呟いた。

「『其は焰、命の宿り木である。其の揺らめきは神聖にして、其の領分は侵すべからず、嗚呼、幸いなるかな、我らに恩恵与えし母よ』

」

「呪文、ですか？」

不思議そうに、シェイルが聞いた。

「いや、祈祷文だよ。何十年も昔に覚えたね。……懐かしいなあ」

ほくほくと、ライナーは目を細めた。

過去、それほどに不可侵の存在であつたモノを、まさか騙る事になるとは。

少し哀しくもあつたが、心にはわくわくとした好奇心も同居していた。

あわただしくしていた神係の面々が、それぞれの配置につく。もうすぐ、『聖女』来訪と予測されている時間帯だった。

ライナーとシェイルも、念のために姿を認識させない結界を張って待機する。

それから、十五分ほどたったころだろうか。

パシン、という高く澄んだ音と共に、空間が歪んだ。

そして、その歪みから、森の中へと落ちてくる少女が一人。

胸元ほどまでの黒髪に、黒い瞳のその少女。間違いない。予見された少女そのものだ。

ライナーが静かに合図をすると、瞬間、様々な術が発動される。

少女の周囲に結界が張られ、外部からの音が遮断される。同時に森の中に神秘的な光も降り注がされ、風が止んだ。

そして浮遊の術で中空に浮かんだ銀髪の少年が、衣をふわりとなびかせて降りたつた。

銀の髪をなびかせて、呆然としている少女の下へ、はねるように歩み寄る。

「見つけた、僕らの『聖女』」

彼は笑みと共に、声に嬉しさを滲ませた。幼いとは言え、さすが『神』候補に選ばれた事はある。演技は完璧だった。

「え……？ 君、誰？」

少女が目丸くして尋ねると、少年はくりりと彼女の前で振り返り、森の奥へと叫んだ。

「姉さん！ 見つけたよ！ 僕らの『聖女』だ！」

心の底から、嬉しそうに。

少年は長い袖に風を纏わせて言った。すると、森の奥から鹿や栗鼠と言った森に住まう動物達を引き連れて、若い女が遣ってくる。

若葉色の布を全身に纏った、さながら貴婦人のような、けれどそれでいて母性に満ち溢れた、赤い瞳の女だ。

「まあ。あなたが、そうなのね？」

ふつわりと微笑して、彼女は少女に視線を遣った。

少女はどきまぎと、「あ、あの？ ええつと」と、動揺の言葉を連ねている。

「あなたたち、誰です？ それに何で、こんな所に急に……」

こんな所に、とは、自分の事だろうか。

女は内心首を傾げたが、それでも演技を続ける。

「あなたが、『聖女』だからよ」

神々しささえ纏わせて女が言っと、隣に寄り添う少年も麗しいばかりの微笑を浮かべた。

「せい、じょ？」

「そうだよ！ 君は僕らの『聖女』！」

「そして、この世界の救い手じゃ」

少女が黒い瞳を瞬かせて疑問を言葉にすると、少年と女の後ろから、柔らかな光と共に、白髭の老人が現れた。

祭典計画『神』役の揃い踏みだ。

「吾が名は、明かせぬ。何人たりとて口には出来ぬ。けれど、人の子らは我らをこう呼ぶ 『均衡の統べ手』、『神』と」

白い衣服に身を包んだ老人が、少女へ向けて静かに言った、その瞬間。

防音結界の外では、隠れてその光景を見ていた人々の、こらえ切れなかった笑いの数々が響き渡った。

「やっばい、爺さん完全にはまり役！」

「お腹痛いお腹痛いっ！ もう、何、あたしのこと、笑わせ殺したいんですかあいつら……っ！」

「お前ら堪えろ！ 無理かもしれないけど堪えろ！」

あたりではかしやりかしやりと、記憶装置が作動する音が聞こえる。

同時に爆笑しながらも舞台係や、それを補助する道具係の面々は、必死になって術を作動させ続けていた。

一方大方の役目を終えた衣装係たちは、ライナーやシェイルの居る結界の中へといつの間にか移動してきており、そちらはそちらで笑いつつも衣装の心配をしたりと忙しい。

結局、『神』役候補は三人とも『神』役となったのだ。

事前の『設定』では、この世界は一神教を信奉しているとの事だったので、変更には苦労した。

けれど結局、唯一神である老人と、その娘と息子である半神二人

の神話を加える事で、三人の『神』の顕現が実現した。

この辺りは、何気にデイトリシアの経済界の重鎮の重鎮の舅だったりする、ジルクーダ老人の伝手がきいていたのだろう。

「成功、ですかね」

ライナーが感慨深げに言った。

結界の中で、少女は「聖女とは、何をすればいいのですか」と、無垢な眼差しを『神』役たちに向けている。

シェイルはそれを目に留めると、少しばかり困ったように微笑した。

「そうですね。これでひとまず、我ら聖女擁立担当部署、神顕現係の、大きな最初の仕事は終了、ですか」

それは即ち、祭典計画の本当の意味での開始の、合図となる一言でもあった。

かくして我らは今日、神聖にして侵さざるべきであつた神を騙る（後書き）

作者：篠崎伊織

同作者の同名の短編連作から転載

真っ赤なイチゴは落ちてゆき、砕けて散って染み込んだ

五月の連休前に告白されて付き合い始めたのだから、あたしたちは、三ヶ月弱の交際期間だったということになる。

「事情って、なによ……！」

出た声色はあたしが思っていた以上に未練たらしく、恨めしそうに聞こえた。

今日、別れ話を切り出されることなんて、わかっていたことなのに。そう。予測できていた。

彼がクラスメイトのほのか先輩に告白されたことは、聞きたくなくともあたしの耳には入ってきてしまっていたし、二人が廊下でなにやら微笑み合っているのも一度目撃していたから。

「事情っていうか、その、……別に、好きな子が、できたんだ」

一コ上のセンパイ。あたしが入学したばかりの四ヶ月前には、頼もしい男の人に見えた。少なくとも、それまでのイモか石ころのような男子たちとは違って見えた。それはたしかだ。

セミの鳴き声が聞こえている。

夏祭りの人出で通りはにぎやかだ。

ぬるい　　昼間よりもいくぶん涼しい風が吹いて、あたしの長い、

真っ白なキャミソールワンピースのすそが揺れた。

うつむくあたし。ユーズド風のデニムの青さといい感じの生地のほころびが目に入る。

まだ二回しかはいてないのにどうですかこの長年はきこんだような表情。イケてるでしょう？

バカ。

浅はかなダメージ加工だ。

西の空はまだ明るいの、あたりはもうずいぶん暗くなってきた。

「そうか……」

やっと、ため口がなじんできていたのに。

初めてできた彼氏だったし、この三ヶ月間のドキドキは本物だった。

「わかったよ」

「……悪い」

「あやまらないで。こればかりはしょうがないよ」

「悪いな、里奈。ごめん」

あたしは、どう無難に別れようかと考えだしている自分に嫌気がさしていた。

いつからそんなに自分に素直じゃなくなっただんですか？

まだ高校一年生なのに、はじめての別れのシーンなのに、どうしてこんなに冷静に頭が回転してるんですか？



「俺、別に、里奈が嫌いになったってわけじゃないんだ」

はい？

何を云ってるんだこのひとは。

「部活でもさ、これまでみたいに接してよ。頼むな」

あきれた。

ここまで自分勝手なひとは思ってたなかった。

なによ、じゃあ、ほのか先輩のことを好きになったのに、あたしのことも同時に好きっていうこと？

なんで同時に二人の異性を好きになれるの？

そんなのって考えられない！

男子ってみんなそうなの？！

怒りからか、汗が噴き出してきた。

インナーに來ている薄むらさき色のキャミの胸元に、汗がにじんだ。

そっぴやうちのお兄ちゃんも、パソコンで、女の子ばかり出てくるゲームやってたなあ。

どの子がヒロインなのって聞いたら「みんなヒロインだよ、ある意味な。だれを狙うかで、その女の子がヒロインになる」みたいな、意味がよくわかんない回答があった。

「ハーレムは男の夢だからな」だって。

バカ。

浅はかな夢だ。

高校に入って、親友の千尋に誘われて入部した演劇部。

入部してひと月足らずで先輩に告白されて、あたしは人生で初めて「彼女」ってものになって。

秋の文化祭に向けていよいよ練習も本格化してきたこの時期に、別れ話とは。

……あ、やばい。

千尋って、ほのか先輩になついてるんだった。

ほのか先輩もほのか先輩だ。

あたしとセンパイが付き合ってるってこと、知ってるはずでしょ？  
それなのに告白するなんて。

略奪愛？ そんなにいい男だろうか、こいつが。

……あ。

ハハ。もうすでに彼に愛着を無くしてる自分がいる。

彼はそれじゃねとかなんとか、猫なで声のようなものを発して、あたしから去った。

なんかよくわからないうちに、あたしは夏祭りが催されている町はずれの付近で、一人たたずんでいた。

茫然。

自失。

頭の一部が働かず、でもどっか一部が猛回転しているような感覚。

心のどっかが麻痺していて、でもそれ以外はマイナスの感情にぐらぐらしているような感覚。

お母さん、これが失恋ですか？

はい、そうです。

答えを自分で出すな、自分。

とぼとぼ歩くあたし。

むき出しの肩にふれていく初夏のそよ風。

大音量で流れてる有線。よりによってあたしが好きなラブソング。こんなときに聴きたくない。この曲が嫌いになったらどうしてくれるんだ。もしそんなことになったら、あたしはセンパイとほのか先輩を一生恨むだろう。

ぼんやりした頭。

じんわりと汗が染みたキャミ。

しつくりとなじむ履きはじめて一ヶ月たった白のスニーカー。

明日から、部活どうしよう。

気まずい。

行きたくない。

何よこの人間関係。

ほのか先輩のバカ。ほんわかした名前のくせに、全然ほんわかしてないじゃん。

千尋も千尋だ。なんであんな女になついているんだ。

……居場所、ないんじゃないだろうか、あたし。

なによ、このシチュエーション。

いやだ。  
逃げたい。

土手の上を力なく歩くあたしに、夕暮れの生ぬるい風が吹き抜けていく。

……帰ろう、家に。  
予定よりもずいぶん早い帰宅に、お母さんもお父さんも理由を尋ねるだろうか。

ちりりん

近くで風鈴の音がした。

ううん。近くじゃなくて遠くからかな。  
だってまわりには家もないし、風鈴を釣っているようなものも見あたらない。

……おかしいな。  
たしかにいま、風鈴の音が聞こえたのに。

自転車を通り過ぎたのに気づかなかったのかな。  
自転車のベルにしては澄んだ音だったのに。

あれ？

耳元で、  
そばで、大勢の音がする。

あれ、この曲

あたしの好きな、ラブソングの最後の部分

どうして？

あたしは周囲を360度見渡した。

人の姿はない。

なのに、いろんな音が聞こえてくる。

え、ええ？

風景が

あたりの景色が大きくぐにやりと歪んだ。

ばしん

足元のどこか低い場所で、なにかがはじけるような澄んだ音が聞こえたような気がした。

なに？ なにが起きたの？

周囲の音も、見渡す景色も、肌を吹き抜けていた川沿いの風も、なにかもが一緒くたに混じり合った。

ぐらん

音と色と肌触りが混同されるその濁流の渦に、自分の身体も心も卷

き込まれていくような　　！

うわ　　っ?!

あたし、という存在のあれこれが、  
中に浮かぶような奇妙な気配、と、その直後に、

落下していく、感覚　　。

落ちていく。

ものすごいスピードだ。

落ちる。

あたしは落ちていつている。

落ちる　　？

方向なんてわからない。

落ちているのか、それとも上昇しているのか、

その問いに、意味はあるのか。

速いスピード？

本当にあたしは移動しているのだろうか？

もう、はつきりとした景色もなにも、目には何も映らない。

音も、轟音が聞こえていたような気がしていたのに、耳を澄ますと  
静寂だ。

この世界のいちばん低いところから、  
もうひとつ下に、落ちた。

雨粒のひとしずく。

宇宙のように広大な空間を、  
落ちていくアマツプ。

雨粒はふつつ、たくさんの、無数の雨粒がいつぺんに降る。それが  
雨だ。

あたしは　ひとつぶで落ちていく。

あたし　アタシって、  
なんだ？

そうだ  
遠藤里奈、という名前の  
誕生日が来たばかりの  
十六歳の女子高校生

という記憶は  
ほんとうにあたしのもので  
これまでの時間や人生は

ほんとうにあたしのこととして実在していたのだろうか

それすらもなんだかたしかだと  
実感できないようなぼんやりとした意識の中で

もう里奈という魂は

ほんとうにただのアマツプのようなひとしくなってしまうてい  
た。

遠藤里奈だった心や身体は、  
宇宙空間のごとく広い、どこまでも限りなく広大な空間を、まっす  
ぐに落下していった。

里奈は自分を肌色だと認識していたけど、  
里奈の中身は赤かった。

真っ赤なイチゴのような色。  
全身をすみずみまでくまなく駆け巡っていた、血液の色とか、そう  
いうものの色。  
赤いイチゴの一粒。

薄明るい空間。  
落ちるミクロの雨粒。

その空間には、巨大な“樹”が在った。

惑星のように大きな枝

恒星のように大きな幹

銀河のように大きな根

極小の水滴が、どんどん落ちてゆき、  
ついには広大に張りめぐっている根っこの一部に到達する。

雫ははじけ散った。

真っ赤なイチゴのように碎けて散った。



はじけ散ったといっても、宇宙のように大きな樹の根っこからみれば同じ場所に落ちたのと同じで、その雫は、根に吸い込まれてゆき、またひとつになる。

時が流れる。

悠久の時の流れ、と云えるのか否か。

時間の流れの速さを計る存在はこの空間にはいなかった。  
だから、刹那も悠久もその定義に意味はなかった。

星が一周する長さなのか  
泡のはじける長さなのか  
大地が生まれる長さなのか  
火花が散る長さなのか

比べるものはいなかった。

雫だったモノは、やがて根の中を通って、樹の幹に至る。  
大きく広い茎のような場所を通過し、樹液が茎を通って枝へ、枝先と運ばれるように、  
雫も枝先に到達した。

花が、開く。

花が、世界へ開く。

開いた花には、実がついている。

実は、少しだけ育ち、形がはっきりとしてくる。

そして

うたたねの中での不確かな意識のときあいまいな時間が流れて、  
実が花から離れる瞬間が訪れる。

その瞬間

里奈の魂と身体と心と精神は、  
この世界に存在していた。

落ちていた    と思ったら、浮かんでいた。

落ちてからどのくらい経ったのだろう。

頭はぼんやりしている。

とても、ねむい。

おそろしく、ねむたい。

音は、依然として何も聞こえない。

だけど、視界ははっきりしてきた。

下の方に、木々の葉や枝が見える。

森の、上空に、浮かんでいる    ？

なんなのよお

あたしの頭上、空の上。

数え切れないほどの鳥たちが見える。

あんなに高いところにいるのに

あんなに大きい

大きな、白い鳥たち。

空高く、飛んでいる。

下を見る。

木々、枝葉、小さく見える花々。

森だ。

あの蒼穹を舞う鳥たちと、足元に広がる森林との間の空間に存在しているのは、あたしだけ。

風も吹いていない。

音もしない。

匂いもしない。

あたしは、いったいどこにいるんだろう、  
なにに巻き込まれたのだろう。

いろんな色彩の光が降りそそんでいる森林のただなかへ、あたしは  
ゆっくりと降りてゆく。

（ え？ ）

人影が、視界に入った。

おとこのこ ？

少年が見えた。

こちらを見ているのがわかる。

降り注ぐ光にきらめく銀色の髪。

身にまとっている、見慣れない衣装が、ゆるやかになびくのが、…  
…きれい。

「みつけた。　。　ぼくらの、“聖女”」

そう聞こえた。

あたしには、そういう意味が伝わった。

「　え？」

声が出た。

いつもの、あたしの声だった。

遠藤里奈の、声だった。

「きみ……だれ？」

銀髪の少年はほほ笑んだ。

きれいな顔立ちだった。

これまでの人生であたしが目にしたどんな顔立ちの人よりきれいな

顔立ちだった。

意識が遠くなる。

むき出しの肩にふれる空気がすこし冷たい。

“聖女”って、“天女”みたいなひと？

あは。

すその長い真っ白なキャミワンピが、羽衣のように見えなくもないな……。

バカ。

浅はかな比喻表現だ。

そんなことを考えたのを最後に、  
どんどん意識が薄れていく。

少年のほかにも、人影が見えた。

声も聞こえてくる

あたしも、なにか返事をしているんだけど、  
その声自分が発しているものだという感覚も薄れてゆき

ぐらん

あたしは、  
気を失うよりも深い眠りに落ちた  
。

真っ赤なイチゴは落ちてゆき、  
砕けて散って染み込んだ（後書き）

作者：さすらい物書き

砂漠の王女の好奇心は、止まることを知らぬかのように

その方の爆弾発言には、慣れたつもりだった。呼吸をするような感覚で物凄いことを仰るのだから、慣れなければ彼女専属の侍女など務まらない。だから、慣れざるをえなかったのだ。そう思っていた。

…… だけどそれはあくまでも普通の爆弾発言に限ったことだと、私は思い知らされることになるのだった。

それは、とある夜のことだった。

「エラ、エラ！ 何処にいますの？」

「ここですわ、レティシア様。お疲れでしょう、今日はもうお休みになられては？」

「ええ、もちろんそうしますわ。ただねエラ、お父様やお兄様、シルヴィの話をお聞きまして？」

その輝く蒼い瞳に嫌な予感を覚えつつ、心当たりが無いわけでもなかったので答える。

「祭典計画、でしたかしら」

「ええ！ 面白そうな響きだと思いませんこと！？」

「…… そうですね、確かに面白そうな響きであることは認めますわ。ですがレティシア様、一体何処でそれをお知りになったのです？」

こういうことになるから、国王陛下や王子殿下はレティシア様にこのことをお話にならなかったのに……

訊ねると、彼女は目を輝かせながら話してくれた。

\*\*\*

今日の午後のことですね、私はいつもわたくしのようにお父様やお兄様との静かな食事を終え、家庭教師の待つ部屋へと向かおうとしまし



たの。仮にもこの国の第一王女ですもの、王位を継ぐのはお兄様とは言え、私にも覚えるべきことはたくさんありますわ。ですから私も……勉強は嫌いですけど、お父様やお兄様のため、覚えるべきことを覚えるのは当然と、日々勉強に取り組んでいるのですが……今日は私にとってそれ以上に大事な用が、出来てしまいました。

『祭典計画』

そんな単語が、通りかかった部屋の中から聞こえてきたのです。

祭典！ 祭典ってつまり、お祭ですわよね？ 何て楽しそうな響き！

更に話を聴いてみると、どうやら部屋の中で話しているのはお父様やお兄様を含む国家の重臣が数名、そして一人の女性のようにでした。

その女性の声にも、勿論聞き覚えはありました。私だって国に貢献している家臣の名くらいは覚えていますわ。それはどうやらシルヴィのようでした。ええ、未来視のシルヴィ・リーゼンフォードですわ。

彼女が前に変な未来を視たと言っていたのは知っているでしょうけど……どうやらそれを危惧したディリトリシアとリーゼンフォード一族が話し合ったらしくて、その『変な未来』を食い止めるために発案されたのが『祭典計画』らしいのですわ。

何でもディリトリシア王国全体で予見された全ての事柄を演じる……などという大きな計画らしくて、そのために近隣諸国にも協力して欲しいと頼まれたらしいのですわ。それが三ヶ月前。

今回は『聖女』役の少女がもうすぐ来訪してくるから、と連絡が来たらしいのですけど……

って、そんなことはどうでも良いんですよ！

祭ですわ、祭！ 何でこんな楽しそうなことを教えてくださらなかったんですの、エラ！？ それにお父様も、お兄様もですわ。今日は部屋に踏み込むわけにも行きませんでしたけど、勉強中もずっと考えていたんですよ？

で、夜になったらエラに訊こうと結論付けたんですけど……とう  
ぜん、答えてくださいますわよね？

\*\*\*

話を終え、じつと私を睨みつけるレティシア様……この国、アズ  
ファードの第一王女殿下、ちなみに十七歳。一応彼女専属の侍女と  
いう立場にある私は、彼女に向けて嘆息した。

「……何故レティシア様にこのことをお話しなかったのか、ですか」  
「そうですね！ エラは当然理由を知っているのでしょうか？」

「もちろん」

頷きはしたものの……話さなきゃいけないのかしら。嫌だなあ。

この方絶対怒るよなあ。陛下も殿下も、絶対私に面倒なことを押し  
付けるつもりであんな提案したよなあ。

……腹をくくりますか、仕方ない。

「ええとですね……理由は、レティシア様なら絶対にそんな反応を  
するからだ……と、私は聴きましたが」

「そんな反応って……どんな反応ですの？」

「そんな反応、です。レティシア様は好奇心を抑えると言うことを  
知らないご様子ですので」

「失礼ですわねえ……仮にも王女にそんなこと言って良いんですの  
？」

「この程度の発言に怯えるようではレティシア様専属の侍女など務  
まらないこと、貴女が一番良くご存知かと」

「それもそうですね」

あっさり納得する辺り、この方も一応自分の性格はしっかり分か  
っているのだろう。

だけどもあ、分かっているのと自粛するのとは別なわけで

「さて、それじゃ行きますわよ、エラ。幸い今日は勉強の予定もあ  
りませんし」

翌朝。身だしなみを整え、朝食を終えたレティシア様は、当然そ

んなことを言ってきた。

まあこの程度で戸惑うようじゃ、とつくに職を失って路頭に迷っているわけで……私はいつものように冷静に、王女に向かって問いかける。

「どこへですか、レティシア様？」

「ええと、まずはお父様やお兄様、それにシルヴィのところでしょう。それから……まあ、着いて来れば分かりますわ。ほら、さっさとなさい！」

主に言われてしまえば、あくまでもただの侍女である私に断ることなど出来るはずもなく……かくして今日も私は、巻き込まれるのだった。

「失礼致しますわ」

国王陛下をはじめとする国のトップは今日もまた『祭典計画』について会議をしている、という情報を私から手に入れたレティシア様は、返事も待たず会議室に乱入する。

当然部屋にいたメンバーから注目が集まり……私はとりあえず頭を下げる。

「……申し訳ありません、隠し通せませんでした」

「あら、エラは私の質問に答えただけでしょ。それで良いのですわ。私専属の侍女なら私の言うことを聞くのは当然ですわよ？」

庇ってくれたつもりなのか……私へのお咎めは無く、レティシア様はそこにいたメンバーに『祭典計画』のことを確認する。

昨夜私がしたものと同じような説明を聞き終えると、彼女は満足そうに頷き、私の方を見た。

「そういうわけで、お父様にちょっと相談がありますの。エラはちよつと廊下で待っていなさいな。別に聴かれても大した問題じゃありませんけれど、今はその方がスムーズにことが進みますわ」

「どういうわけか知りませんが……一体何のお話をされるのです？」  
「それは後で話しますわ。どうせ分かるでしょうし」

……この王女様に対して言い返すことがどれだけ無駄なのかはよく知っている。

「分かりました、では廊下で待機しています。……ちょっと良いかしら、シルヴィ？」

「何？ ……陛下、少々席を外させていただきますね」

席を立ち、私について廊下を出るシルヴィ　シルヴィ・リーゼンフォード。未来視の力を持ちアズファード王室に仕えている、八年前に偶発渡来してきた女性である。来訪者の多くがディリトリシアの国民である中、リーゼンフォード一族でありながらディリトリシアの国籍を持たない少数派の人間の一人だ。ちなみに私より二歳年上の二十二歳。

全体的に瞳も髪も黒っぱいこの国では目立つ、向日葵色の髪に蒼い瞳。渡来してきたときは白かった肌は流石に日に焼けて、アズファードの国民のそれに近い色になっているけど……初めて会ったときは羨ましく思ったりもしたものだ。

「エラも大変だねえ……で、何？」

「他人事のように言ってくれるわね、シルヴィ……貴女も大変そうだなあと思つて。仕事のときは引き籠もっているか、そうじゃないときは適当に遊び歩いているかの人間がいきなり国王陛下や王子殿下、それに国のお偉いさん方と会議でしょう」

「失礼だなあ、一応未来視の仕事のときは直前に陛下に謁見してるよ……まあ、流石にあそこまで息が詰まる会議は初めてだけだよ」

「でしょうね。多分これからもっと増えるわよ、そういう会議」

「うげえ……」

心底嫌そうな顔をする友人に、私は一番重要なことを言っておく。「そうそう、その間、私から助言は出来ないと思うわ」

「へ？　何で？」

「どうもレティシア様、何か企んでいそうだから……下手すると私、しばらくこの国を離れなきゃいけないかもね。レティシア様が国を離れると、私もついて行かなきゃいけないでしょう」

「……『祭典計画』関連で？ まったくあの王女様、むしろデイリトリシアの国民に近い性格だよねえ……」

「流石にもう慣れたし、もうあの方も私にとっては王女様と言うより『ワガママな妹』って感じだったりもするのだけどね……と、噂をすれば」

ドアが開く音に振り返ると、ちょうどそのワガママ王女が部屋を出てきたところだった。

彼女は僅かに不機嫌そうな顔で私の方へと歩み寄ってくる。

「まったく本当に恐れ知らずですわねえ、エラ？」

「事実でしょう、レティシア様」

「それは認めますわ」

「認めちゃうんだ……」

驚くシルヴィに対し、私は軽く手を振る。

「じゃ、そういうわけで私は行くわね。貴女はさっさと入らないと、会議再開出来ないんじゃない？」

「あ……そうだった！ レティシア様、それではっ」

「ええ、御機嫌よう」

答える王女の晴れやかな笑顔を見る限り、どうやら陛下への『相談』とやらは上手くいったらしく……私の嫌な予感、膨れ上がるばかりだった。

続いてレティシア様が足を運んだ場所は、騎士団の訓練場。……

もうここまで来ると嫌な予感は確信に変わっていたのだけれど、放置するのも怖いので一応訊ねておくことにする。

「レティシア様……兄に、何か御用なのですか？」

「ええ、すぐに説明しますわ。……と、いましたわね。アラン！」

彼女が声を張り上げると、それに気付いた一人の騎士がこちらへやってきた。

この国の殆どの人間がそうであるように浅黒い肌、黒髪に黒目。そして私とよく似ているらしい顔立ちのその騎士の名は、アラン・

バルシュミーデ。

私と同じ姓を持つ彼は要するに四歳年上の私の実の兄であり、最年少で騎士団の小隊を一つ任せられる程度には腕も良いエリート騎士なのだった。

「どうも、レティシア様。うちの妹まで引き連れて何の用です？」

……私と同じ、いや私以上に碎けた口調の兄。まったく王女相手に……とか思いつつ、私も人のことは言えない上にレティシア様も気にしていないようなので放っておいているわけだけど。

「兄さん……とりあえず、今は返事しないで逃げるべきだったわ。

脱兎の如く」

「は？ 何言ってるんだエラ、王女様に呼ばれて無視する馬鹿はいないだろう」

「まったくですわ。……ところでアラン、『祭典計画』のことは聴きまして？」

「ああ、ディリトリシアでやるっていう……あれがどうかしたんですか？」

「面白そうじゃありませんこと？」

「……………まさか」

王女が何を言うか、ようやく予想出来たらしい兄の顔が強張る。

ああ、だから言ったのに……

「お父様に許可も頂きましたし、私、一年間ディリトリシアに滞在することにしますわ。あまり大人数で行っても目立ちますから、貴方達二人にだけついてきて貰いますわよ。もちろん、異論は認めませんわ！」

……………こうして。

傍観者でいたかったのにも関わらず、私達は当然のように巻き込まれたのだった。

王女の暴走に、そして『祭典計画』に。



砂漠の王女の好奇心は、止まることを知らぬかのようだ（後書き）

作者：高良あくあ



輝く星たちは、飛ぶように過ぎる時の中でせわしく走る

「聖女ってどんな人だろうなー！楽しみだなー！」

生贄が来る一時間前、王宮の廊下をニコニコしながら歩く少年がいた。

期待に胸膨らませ、キラキラと光る金の瞳。少し癖のある銀色の髪。まだぶかぶかの軍の制服や腰に吊った短剣はまるで兵隊ごっこをしている子供に見える。が、この少年もれっきとした王国軍の一員である。

実年齢十三歳、見た目だけだとさらに幼く見える少年はテオといい、とある事情でレオンハルトが軍に口添えし、最年少で軍に入った少年だった。

だが、若く純粹すぎるこの少年は祭典が始まる際、三大將軍の悩みの種となった。

問題は、この純粹すぎる少年が生贄をだますことができるかどうかだった。

純粹であるがゆえに正義感も強いこの少年は、「だますなんてひどいよ！」といって生贄に真実を教える可能性もある。

うまく説得できたとしても生贄に何も悟られずに一年間過ごせるほどポーカ―フェイスの備わった人間でもない。

ここでおまじめなアルトゥールが困っていると、ホラントがひとつの案を出した。

「テオに生贄が本当の聖女だと信じさせ、生贄の周りに配置して『あなたは聖女だ』と言わせ続ける」というものだ。

こうすればテオに本当のことを伝える必要もなく、生贄にも『自分が聖女だ』と認識させることができる。

こうして、テオは王国では初の事情を知らない兵隊となつたのであった。

そんなテオは今、レオンハルトの命令で鳥使いを呼びに行っていた。兵舎の奥にある高い塔。そこが王宮で使われる伝書用の小鳥の住処で、テオのめあてである王宮でたつた一人の鳥使いのいる場所だつた。

「モニカ。いる？」

声をかけてから返事を待たずに塔の扉を開ける。返事を待っても無駄だからだ。

扉の向こうには少女が立っていた。塔の窓から差し込む光を受けて輝く銀の髪、優しい光を持つ金の瞳。鳥たちに囲まれてたっている少女はテオより三歳上で、その美しさから彼女も聖女なのではないかと考えてしまう。

少女はテオに気付くにつこりと笑った。

「モニカ、レオンハルト将軍が聖女の歓迎に鳥を連れてきてくれて」

テオの言葉にモニカはうなづく。

モニカはこの国でたつた一人の鳥使いで、テオの姉でもあった。もともとときこりの家に生まれた二人はティザン山脈のふもとの村で暮らしていた。

だが、モニカが12歳、テオが10歳のときに両親が魔物に襲われ両親は死亡、モニカはショックで話すことができなくなってしまった。

子供二人では働くのも難しいし、おまけに一人は深い心の傷を負っている。親戚もいない彼らは本当に困ってしまった。

そんな時、同じ村出身でテオとよく遊んでいたレオンハルトがその話を聞き、やんちゃでかなりの剣の腕前のテオを軍に入れることができないかと前将軍と交渉し、軍に入れた。その後、心の傷を負ったモニカをどうにか癒すことはできないか考え、鳥使いの仕事に彼女を進めた。

そんなレオンハルトの気遣いのおかげでモニカも笑顔を取り戻し、2人は幸せに暮らしている。

「ねえねえ、聖女ってどんな人なのかな。楽しみだよ〜。きっと綺麗なんだろうな、モニカみたいに」

そんなテオの言葉にモニカは苦笑する。

モニカの肩に止まった小鳥が楽しそうにチチチと鳴く。

「あ、お前今俺を笑ったんじゃないだろうな。むう……」

小鳥をにらみつけると小鳥はまるで人の言葉を理解しているようにさらに楽しそうに鳴く。

モニカはそんな一人と一匹を見ながら手元の紙にペンを走らせる。

『今日は忙しいんじゃないの？あと一時間で生贄が来るんじゃない？』

「あ、そうだった。急いで着替えてこなくちゃ。じゃあレオンハルト將軍によろしく！」

そう言うときオは風のように廊下を走っていく。

(……もう少し落ち着くように言うべきかしら)

モニカが考えると肩の小鳥もちょっと首をかしげる。

(……まあ、いいか)

小鳥がせかすように方を離れ、生贄の歓迎に向けてせわしく人々の動き回っている大広間に向かう。

モニカもその後を追って走り出した。

モニカが大広間に向かっていている頃、その大広間ではちょっとした騒ぎが起きていた。

「生贄は女の子なんですよ！？なら絶対お菓子の家で歓迎するべきよ！女の子はお菓子が好きなのよ！」

「それはお前の好みだろう。生贄は日本人だというし、やはりここは我ら『忍術研究部』の連続木の葉がくれの術で……」

「木の葉がくれの術なんて綺麗じゃないわ！中世ヨーロッパ風の大広間で木の葉がくれの術なんて似合わないわ！」

「ならお菓子の家はいいのか！？まったくお前は日本人の癖に魔女なんかに飲み込まれやがって」

「魔女をバカにしないでよ！時代は魔女っ子ブームよ！」

「いやいや、今は忍者の時代だ！魔女なんて日本の恥だ！」

と、謎の言い争いをしているのは王宮の魔術師たち。の中の『魔女同好会』代表日本人トリッパ―麻耶と、『忍術研究部』代表日本人トリッパ―陽助だった。

この二つの集団は主に現代日本人の『オタク』が中心となった集まりで、現代ではできなかった魔法が使えるようになったので魔女っ子をやってみたりだとか魔法を進化させて忍術に改造してみたりだとか、そんなことをやっている。

このメンバーである魔術師たちが演出について言い争っているのだ。

「お菓子の家よ！」

「木の葉がくれの術だ！」

「うるさああああああい！！！！お前ら少し黙れ！！」

その怒鳴り声で騒いでいた人々が口を閉じる。

怒鳴った本人、アルトウールは泣く子も黙る邪眼で周りの人間をにらみつける。

「いいか！？生贄が这个世界に来るまであと一時間を切ってる！つまりここに来るまではあと三、四時間しかないんだ！言い争っている暇などない！木の葉がくれの術もお菓子の家も却下だ！」

「ええええ！？そんな〜」

数人が反論しようとしたがアルトウールににらまれて静かになる。

「よく考える！大体の演出はすでに決まっている！いまさら変える時間はない！ゴチャゴチャ言わずにちゃっちゃと準備しろ！！」

ここまで言っていると魔術師たちはしぶしぶ準備のために散っていく。

「まったく……」

「大変そうだな、アルトウール將軍」

アルトゥールの背後から声がかかる。すばやく振り返ってアルトゥールは反射的に跪いてしまった。

「アルフレート様！」

反射的に動くアルトゥールの姿に苦笑しながらアルトゥールに声をかける。

「おいおい、堅苦しいから立ってくれないか？」

「ですが……」

「いいから。祭りの間は堅苦しいのは無しだ」

ニコニコとそういうアルフレートにアルトゥールは内心ため息をつく。

（さすが祭り好き民族……）

少し迷いながら立ち上がり、アルフレートに聞く。

「アルフレート様、なぜここにいますか？」

「ああ、聖女の歓迎に参加するからだよ？あと、聖女はもうこっちに来たって連絡が入った。時間差があるからもう移動を始めてるだろうな」

「もう来たんですか。はあ……」

予想以上に早い。移動もできるだけ早い手段を使うといていたからあまり時間がない。

「アルトゥール、アルフレート様。楽団のほうは準備できました」

「了解」

ホラントも準備を終えてやってくる。

「アルフレート様はどのような役をやることになってるんですか？」

「美しき聖女を歓迎する国代表の王子。いやー、楽しみだね！」

「そうですね……いよいよ祭典が始まるんですね……」

しみじみと、かつ楽しそうにホラントとアルフレートが話す。

「まだ実感がわかないなあ……」

ホラントがそう言うといつ来たのかレオンハルトが言う。

「実感がわく情報があるんだけどさ、聞く？」

「？なんだ？」

「……言いたくないんだけどさ、生贄が来るまであと三十分になった」

「「はあ!?!」」

その言葉が聞こえた人間全員が一斉にレオンハルトを見る。

「なんか、テレポートでつれてくることになったんだと。だからまじめに時間がない」

「なんだと!?!」

「今は神係たちがうそ吹き込んで時間を稼いでる」

「これは……ヤバイかな?」

「やばいかな? じゃなくてやばいんです。ものすごくやばいんです」  
そう言うとレオンハルトはすうっと息を吸い、できるだけ大声で言う。

「生贄が来るまであと三十分だ!! 最高スピードで仕事をやれ!!」  
こうして、王宮は本当にせわしなく準備を進めることとなったのだ。  
った。

輝く星たちは、飛ぶように過ぎる時の中でせわしなく走る（後書き）

作者：柳リヨウ

歪められようとしている未来を、我は正しき道へと導こう

普段は分厚い雲に覆われていることが多いデイリトリア王国も、その日はめずらしく雲ひとつなく晴れ渡っていた。国中の人々は、祭典が始まるに相応しい日だと、よりいっそう興奮し、歓喜していた。その気持ちは、王宮に住まう者として同じであった。

デイリトリア王宮は、四百年前に渡来したリーゼンフォード一族により建立された、バロック様式にも似た造りの壮麗な宮殿であった。彫刻が施された王宮内には、通常、いたるところに従者が控えているのだが、今日という日は皆、聖女が住む事になる離宮に移動しているため、数える程度しか残っていないかった。

そんな中。

「姉上、待つて。どこへ行くの？」

変声期前特有の、まだあどけなさが残る声。

真昼の太陽に照らし出されたステンドグラスを全身に浴びながら、少年はぐいぐいと少女に手を引かれ、おぼつかない足どりで歩いていた。母親譲りの見事な髪、プラチナ・ブロンド。原色の光を纏ってもあつてもなお、その輝きを保っていた。

感嘆に値するこの髪の持ち主は、名をアビゲイルといった。デイリトリア王国の第三王子だ。そして彼の手を引くのは、一つ年上の第一王女、アリスタシア。彼女の髪は父王に似て、豊かな栗毛であった。それはいくつもの三つ編みにより計算されつくして束ねられ、頭上で豪華な銀細工とともに結わえられている。

二人は普段、付き人なしでは王宮内さえ自由に歩くことはできないのだが、今日という日は特別だった。彼らに付き従う余裕のある者は、誰もいないのだ。



「アビイ、遅い。もっと早く歩いてよ。急がないと始まつちゃうよ」  
アビイとは、アビゲイル王子の愛称。身内のみで使われている。  
「姉上、始まつちゃうって？ ま、まさかアレじゃないよね」

「まさかもなにも、アレしかないでしょ。私ね、今日をすごくすく待ちわびていたの。退屈なのはもううんざり」

アリスタシアは桃色の唇をペロリとなめて、いたずらに目を細めた。それを見て、アビイは不安げに苦い顔をした。

「私はこの目で祭典の一部始終を見てやるの」

「祭典に行くの！？」

「当然。参加しなきゃ損だもん。楽しんだもの勝ち。それにね、理由はわからないけど、あの三大將軍が全員若手に代わったらいいし、兵は朝から大忙しだし、ここの警備は甘いはずだわ。外へ出るなんて簡単よ」

「そんな。父上や母上は外へ出ては行けないって。だから……」

「アビイは祭典を見たくないの？」

「見たいけど……でも、外へ出てはだめだから……」

「アビイは良い子ちゃんね」

アリスタシアはアビイの艶やかな髪を指でくると絡めとった。そしてニタリと怪しく笑う。「けどね、たとえ外へ出ちゃだめだとしても、アンタも私と一緒に行くのよ」

アビイは一瞬にして顔を強張らせた。

「ええっ、僕も？」

「あたりまえでしょ。レディを一人にしちゃダメなんだから。何とんでも一緒に連れて行くわ」

「だ、だめだよ！」

アビイは手を引くアリスタシアを振りほどこうとした。が、出来なかった。そればかりか、アリスタシアはどんどん前へと進んで行く。不敵に笑いながら。

「ばかね、だめでも行くの」

「絶対にだめ！」

アビイは両方の膝をピンと伸ばし、踵に力を入れた。同時に、レースの縁飾りが付いたじょうご型のブーツは、キュキュキュと大きく音を立てる。必死に抗おうとした。

これにはさすがにアリスシアも止まるしかなく、

「何よ」

鼻で短く息を吐くと、負けじと踏み出す足に力を入れた。一步、また一步。

「うつつ」アビイは健闘むなしくずるずると引きずられた。「あ、姉上、やめて」

「やめるわけないでしょ」

アビイの重みなどものとはせずに、アリスシアはどんどん進む。とうとう根負けし、アビイは「もう」と情けない声を上げた。

「だめだよ姉上。僕らは父上や母上に祭典の参加を禁じられてる」

「子どもだからってやつね。でもそんな理由、納得できない。父上も母上も過保護すぎるのよ。アンタもそう思わない？」

「でも」

「だいたい不公平なのよ。兄上たちも参加するんだから、私たちにも権利はあるはず」

「でも」

「なんで私とアンタだけが参加しちゃいけないの？ おかしいわよ」

「でも……僕たちにはまだ早いつて……」

「もうっ、でもでもうるわいわね！」

アリスシアは不機嫌に眉を吊り上げた。

「なによ、いくじなし。アビゲイルなんて勇ましい名前なくせに！

ここは勇気を見せるべきよ！」

意味がわからず、アビイは首をかしげた。「僕、好きで勇ましい名前になったわけじゃ……」

「アビイは名前負けしてるのよ。すごく負けまくってる。だからこれからはちゃんと名前どおりに勇ましくならないと」

「え……」

「だいたいそんな真面目な良い子ちゃんだから、いまだにガールフレンドが一人もないのよ。兄上を見習いなさいよ」

ここでの兄上とは、第二王子のことを指す。父王に似たのか、無類の女好きだ。数が把握しきれないほど、たくさんガールフレンドがいる。

「男は女にモテてこそ価値があるの。技量が試されるの。そう兄上も言っていたわ」

「そんな……」

しかし、アビイはまだ十歳。女の子には全くといっていいほど興味がない。

「僕、ガールフレンドなんかいないよ」

「ふっん、そうなの」

アリスタシアはアビイに流し目をし、妙に納得したように頷いた。そしてゆっくりと腕を組む。

「やっぱり思っていたとおり草食男子なんだ。軟弱なんだ。男の子は普通、女の子の事ばかり考えてるものなのに」

「女の子の事なんか考えないよ。絶対、僕が普通だよ」

「うっん。異常よ」

「ちがうよ、普通だよ」

「じゃあ、百歩譲って普通としましょ。……だったらアビイは、普段女の子のことじゃなくて、何を考えてるのよ」

アビイはしばらく考えて、答えた。

「……僕はおもに、絵のこととか、かなあ」

「絵？」アリスタシアは鼻を鳴らした。「そう、だからいつも絵を書いてるのね。好きなのね」

「うん。好きかもしれない」

「あのわけ分かんない絵が、ねえ」

「そんなことない、わけ分かんなくなんかないよ」

「どう見てもわけ分かんないじゃないの。そう言っなら、今朝描いたアレは何なの？」

絵。アビイは日々、従者に紙をこつそりと用意させ、思うままに絵を描いている。ある時はカラーだったり、ある時はモノクロだったり。しかし描かれるものは、毎度、アリスタシアにとって目にした事がないものばかりで、彼女としては不気味としか思えなかった。ちなみに今朝描かれたのは、得体の知れない大きな建造物。それが何であるかは、描いた本人、アビゲイルだって知らない。

もともと、聖女・遠藤里奈は知っているだろう。なぜならそれは、日本であまりにも有名な、東京タワーなのだから。

「わかんないよ」アビイはうつむき、もじもじしながら小さく言った。「何を描いたかわかんない」

「あのさ、それってさ、わけ分かんない絵って事だよ」

アリスタシアは膝を折り、アビイの目線に目を合わせた。

「あのね、私、思うんだけど。アンタがわけ分かんない絵ばかり描くのはね、どこかで現実逃避してるからなんじゃないかしら。現実逃避してるから、空想上のものばかり描いてしまうのよ。だから草食男子になっちゃうの」

「そんな……。僕、現実逃避してないよ」

「だからこれから外へ出て、現実と向き合う必要があるのよ」

「だから僕、現実逃避なんかしてないって」

「そうと決まれば急がなくていい。現実を知るために、まずは『聖女』が来る瞬間をこの目で見なくては。逃しちゃ損だもん」

「え？……姉上、僕の話、聞してる？」

アリスタシアはひよいと幾重にも重なったシフォンドレスを右手でたくし上げると、赤い絨毯の上を軽やかに駆け出した。左手にはアビイの腕。

「わ、ちよつ、ちよつと、姉上！」

聖女が現れるとされている森には、現在多くの者が集まっていた。

祭典計画実行委員会聖女擁立担当部署の者たち。そして、どこからともなく駆けつけた野次馬たち。

彼らから離れる事約十メートル、息を切らせながらアリスタシアとアビイはいた。二人は思いのほか疲れきっている。なぜなら当初の予想をはるかに超えて、王宮から抜け出すのに手間取ったからだ。兵士の目をごまかすのは簡単でも、新しく就任した三大將軍はそうはいかなかった。

「それにしてもあの將軍たちって、背中に目でもあるんじゃないかしら？ 絶妙なタイミングで振り向くんだから。慣れない魔法を使っちゃって、もうくたくただわ」

おでこにはらりと落ちる前髪を横に撫で付けながら、アリスタシアは言った。

それを聞き、アビイは彼女に耳打ちをする。

「將軍に選ばれたトゥールとホラントとレオンハルトって、すごくすごく優秀らしいよ。『選ばれるべくして選ばれた』って前にアルフレート兄様が言ってた」

「そうなの？ もう、そういうのは早く言いなさいよね。それならもつといると準備できたのに」

「知らないよ。だって僕、外へ出るなんて思ってたもん」

「なによ生意気」

言葉を続けようとして、アリスタシアは人の気配を察知した。「

……誰か来るわ。隠れるわよ！」

アリスタシアはアビイの腕を掴むと、すかさず岩陰に隠れた。

「ここに間違いはないのか？」

黒いマントをすっぽりと被った男が、身を低くして歩きながら、隣の同じく黒いマントを着込んだ女に言った。二人の顔は黒い布で覆われ、見えるのは目元のみ。

「はい、確かです。ご覧下さい、あちらにライナー・リーゼンフォードがいます。それに、セイルディート・リーゼンフォードの姿も」  
黒い男は舌打ちをした。「忌々しいリーゼンフォード一族の者か」

「はい。ですからここに『聖女』が現れるのは確かかと」

「ククク」

男は肩を震わせて笑った。

「歪められようとしている未来を、我は正しき道へと導こう」

黒い女は、左右を見渡すと、男に向かい、敬意を込めて礼をした。

「これからいかがいたしましょう。思った以上に人が多いですが…

…」

「今実行するわけではない。今は聖女を一目見るのが目的」

男は女のおごを指でクイと持ち上げると、顔をずいっと近づけた。

「ベアトリス、しっかりと聖女を見ておけ。その容姿を覚えておけ。

我は他にやることがある」

「他に、ですか？」

問いには答えず、男はするりと立ち上がると、足音を立てずにゆつくりと歩き始めた。その方向は、アリスタリアとアビゲイルの方向だ。

アリスタリアはぐくりと生唾を飲んだ。

「ま、まずいわアビィ。変な奴がこっちに来る！」

「ど、どうしよう姉上」

「どうしようもなにも、魔法を使う時間もないし……ここは大きな声を出すしかない。きっとだれかが助けてくれるわ」

「でも姉上、王宮を出たのがバレちゃったら……父上や母上に怒られちゃう」

「ば、ばか。こんな非常時に」

ひそひそとやり取りをしている間に、黒いマントの男は、岩陰に潜む小さな二人を覗き込んでいた。

「あ……」

黒い布から垣間見える大きな目は、にいと細められている。

「これはこれはディリトリシアの第一王女と第三王子。このような所で何をなさっているのでしょうか」

あまりの男の威圧感に、二人は萎縮してしまった。何も答えられ

ない。

男は続ける。

「もつとも、私は未来視でして、あなた方がここへ来られる事を知っていたのですけれど」

アリスタシアは目を見開いた。

「聖女というものは、興味が尽きないものですねえ」

男は肩を震わせ、笑う。「ククク」

「な、何者なのです」

両手でアビイを守りながら、おそろおそろアリスタシアは問うた。

「それは後ほど説明しましょう」

「後ほど？ ということですか」

「聡明なあなたは分かっているでしょう……お連れしましょう、我が城へ」

二人の小さな体は震え始めた。

「姉上……どうしよう」

アリスタシアはアビイの顔を見ると、軽く頷いた。そして、ずい  
と男の前へと進み出ると、背筋を伸ばして言った。

「私があなたの城へ行きましょう。ですが、弟だけは……お願いします」

黒い男の目はさらに細められた。

「ご立派です。貴女の勇氣に讃えて、受け入れましょう」

歪められようとしている未来を、  
我は正しき道へと導こう（後書き）

作者：nico



彼女のためだけに動く彼は、穏やかさと激しさを併せ持つ人だった

リーゼンフォード一族の人間の魔法 『テレポート』によって  
『生贄』が王宮に到着したのと時を同じくして。

デイルトリシア王国の領内にある大平原で、一人の青年が全身を  
黒い衣装で包み込んだ男と対峙していた。

「僕の名前はルアルド・リーゼンフォード。元いた世界ではルアル  
ド・デベロップという名前だったのだが、まあ、それはどうでもい  
いか。

デイルトリシア王国の軍に籍を置く一兵士であり、年齢は 童  
顔のせいで十代後半にも見えるが、これでも二十二歳。好きな色は  
黒。だからというわけではないけど、黒のローブに黒いズボン、お  
まけに長い黒マントと、もう黒一色の格好をしている。そのためか、  
生まれ持った金色の髪と緑色の瞳がとにかく目立つ。そりゃもう目  
立つ。闇に隠れての不意打ちは絶対にできないんじゃないかな、と  
いうくらいに目立つ。

あ、そうそう目に入ると鬱陶しいから、髪は短く切り揃えてあり

」

「いい加減にしないか！」

「いい加減にしない！」

対峙している黒ずくめと　そして、なんとアリスタシアさまからも怒鳴られてしまい、僕は思わず口をつぐんだ。むう、前口上くらい聞いてくれたっていいと思うのだけれど。

「やれやれ、アリスタシアさまはともかく、あんたのほうも意外と余裕ないなあ、と言ってルアルドは肩をすくめてみせた」

「やかましい！」

気の短い奴だ。まあ、僕のボケに突っ込んでくれるのはありがたいけど。……よし、せっかくだからもう少し続けてみよう。敵なのにここまで全力で突っ込んでくれる奴って、貴重だし。

「ふむ。『ボケとツツコミの二刀流』の称号を持つルアルドは肩をすくめてみせた、のほうがよかったか？　とルアルドは黒ずくめの男に問いかけてみた」

「その我をおちよくるセリフをやめろと言っている！」

「というか、いまがどんな状況かわかってるんですか、あなた！」

いまがどんな状況か？　そんなの、もちろん理解してないわけではない。どこからか取り出した短剣を黒ずくめが構えている。しかもその切っ先が突きつけられているのは、姫の首筋。つまりは、切羽詰まっているのだ、マジで。

「でもアリスタシアさま、僕のお気楽な性格も、理解されてはいますよね？」

「それは知っていますが、時と場合というものも考えてください！」

お願いですから、もう少し緊張感を

」

「しかし、姫。いままでのやり取りで少しは解けたでしょう、緊張」

につこりと微笑んで言う。そう、僕は別にただ趣味で黒ずくめをおちよくっていたわけじゃない。そりゃ八割方は趣味だったけれど、残りの二割には姫の緊張を解く意味もあつたのだ。大体、身体が完全に強張っていては、この膠着状態「じゅうせき」をどうにかできたところで、走って逃げることも敵わなかっただろう。

言われてアリスシアさまも「あ……！」とようやくそれに気づき、

「……って、いえいえいえ！ それ、失敗したらどうするんですか！ 激昂したこの男が私を殺そうとしたら、どうするつもりなんですか！」

……う、痛いところを突かれた。

「あー、まあ、そこはそれ……」

つつい言葉に詰まる。……ああ、うん、もしそうされていたらアウトだったな。危ない危ない。

僕は腰に提げてある長剣に右手を伸ばしながら、もう片方の手で短い金属製の杖を構えた。それから長剣で地面にぐるりと円を描きながら言葉を投げつける。

「さて、じゃあここからは少し真面目にいこうか」

闘気を放つことで黒ずくめを威圧。彼の腕の中にいる姫が鋭く息

を呑む。……あれ、黒ずくめは？

「なかなかの殺気だ。だが、足りんな。我にプレッシャーをかけるには」

あ、駄目なんだ。元の世界にいたときには、これだけで大概の敵の動きは封じられたんだけどなあ。まあ、そんなことをばやいても仕方ないので、訂正のために一言だけ口にしておく。

「『殺気』じゃなくて、『闘気』な」

剣を構えてはいるが、僕の信念は『不殺』。殺す意思がないのだから『殺気』なんて放てるわけがない。

それはそれとして、あれで動きを止められないとなると、一体どうしたものか。姫を人質にとられているから下手なことはできないし、もちろん魔法を叩き込むわけにもいかない。

……ああもう！ 僕が元いた世界でなら、やりようはいくらでもあるんだけどなあ！ いや、それどころか人質にとられているのが一般市民とかだったら、殺さない程度の威力の魔法で人質ごと一緒に吹っ飛ばすのもアリっちゃありんだけどなあ！

……いや、やっぱりナシか。そんなことをしたらカナデが悲しむ。

『祭典計画』。

僕の婚約者であるカナデは、その計画の元となる案を出した人間だ。ただし発案したのは軽い気持ちで、だったという。おそらく通りはしないだろう、という考えが頭のどこかにあったんだそうだ。だからこそ、彼女はいま悩んでいる。もし自分の案のせいで多くの人が傷つくことがあったらどうしよう、と。

活発で、ともすれば他人に迷惑をかけることも多いカナデだが、最初からそれを望んで行動しているわけじゃない。自分のしでかしたことに必要以上の責任を感じて傷ついてしまっ、そんな繊細で責任感のある一面だっ、確かに存在するのだ。

僕は、そんな彼女を守りたいと思う。彼女を傷つけようとする、あらゆるものから。『祭典計画』の最中に人死にが出るのが駄目だっ、っていうのなら、他でもないカナデのためだ、そうならないよう、できる限りのことをやってやるさ。

元の世界にいた頃は、職業柄、誰かのためになんて動こうとも思わなかつ、僕だけだ。

『黒き魂』という謎に包まれた『力』を生まれつき持っていたこともあつ、自分のことしか考えられなかつ、僕だけだ。

そんな僕を、彼女は受け入れてくれたから。

人を愛するっ、この責さを、カナデは僕に教えてくれたから。

.....。

.....しょうがない。奥の手を、使っとするか。

目を閉じて、すっ、と深呼吸をひとつ。そして『自分の内側』に意識を向ける。

使っのは、ほんの一瞬だからな。頼むから見逃してくれよ？

瞳を見開き、口の中で呟く。

「  
殲滅対象認定」

瞬間、破壊衝動の塊である『黒き魂』が僕の心を呑み込み始め

「  
ふっ！」

まず、素早いスライディングで黒ずくめの右足を払った。同時、腹筋の要領で身体を一息に起こし、杖を握りしめた左拳で「おらあつ！」とアッパーカット。左の拳は倒れゆく男の右手に当たり、見事、短剣を弾き飛ばすのに成功する。続いて俺は左拳を腰ために構え、左のストレートを叩き込

そこで動きを止め、ぎりつと歯噛みする。それから『黒き魂』から生じる破壊衝動を抑え込もうと、俺は瞳をギュツと閉じた。

壊したい。目の前の男を。

壊したい。黒ずくめが体勢を崩した瞬間、転がるように走りだして男と距離をとった姫を。

壊したい。この場に存在する、なにかもを……！

そんな欲求をなんとか抑え、僕はいつもどおりの精神状態に戻る。……まったく、『黒き魂』の『力』を使っている間は痛みを感じないから、身体が悲鳴を上げるような動きもできるという利点はあるけれど、理性が飛びそうになるデメリットはどうにかならないものだろうか。おまけに言葉遣いだって荒々しくなるし、一人称だって『僕』から『俺』に変わっちゃうしさ。

それはさておき、意識して軽い口調を作り、目の前の男に僕は告げる。

「さ、これですうやく対等な条件になったな。まだやるか？ クロスケ」

「……誰がクロスケだ」

男の言葉には静かな怒りが込められていた。しかし『黒き魂』の『力』を使ったあとはおちゃらけていなければやってられないのも事実。なのでちよつとばかり悪いとは思いながらも、馬鹿にするような態度で目の前の敵に対する。

「気に入らなかったか？ カナデがつけそうなあだ名で呼んでみたんだけど。なら、そうだな……。まっくろくろすけ、とかは？」

「却下だ」

「むう、これも駄目か……。じゃあいいよ、クロちゃんにしよう、クロちゃんに」

と、僕のそのセリフにアリスタシアさまが反応した。

「なに精一杯の妥協をしました、みたいな言い方をしているのです！ そんな呼ばれ方、誰だって嫌に決まっているでしょう！」

うん、とりあえず横から茶々を入れられるくらいには、心に余裕が戻ってきたようだ。よきかなよきかな。

「そうは言われましてもアリスタシアさま。僕はこいつの名前、知

らないんで。姫はご存じで？」

「う……」

あ、アリスタシアさまが詰まった。してみると彼女もこいつの名前は知らないのか。ここで黒ずくめの男が迂闊にも名乗ってくれたら助かるんだけどなあ。

「……そういえば、まだ聞いていなかったな。なぜ我の前に立ちはだかることができた？」

うーん、やっぱりこいつ、そういう迂闊者じゃないな。ツッコミはしてくれるんだけど、決定的な情報は絶対に漏らしてくれない。

……………。

まあ。

いいんだけどな。

どうせいま、僕がここで捕まえちゃうから。

先ほど描いた円の中央に戻りながら、僕は彼の問いに答えてやる。

「ああ、それは僕も未来視が使えるからだよ。それで視たんだ、さ  
らわれたアリスタシアさまがここを通る未来を。」

そうだ、ここでひとつ、豆知識を披露してやろう。この未来視は  
生まれ持ったものじゃなく、当時、修得したてだった<カイツァ・アーク  
を使っ、この世界に渡来してきてしまったときに得た能力なんだ。  
ほら、あれだ、『渡来特典能力』ってやつ」



ガリガリと右足を地面にこすりつけながら続ける。

「どうでもいいことだったか？　ともあれ、お互い未来視が使えるとなると、その『精度』と『どれくらい先まで見通せるか』が勝負をわけることになるわけだけど、あんたには自分が負けるってところまで視えているのか？　ちなみに僕には、僕が勝利する場面がちゃんと視えてるぞ」

嘘だった。いわゆるハツタリというやつだ。僕の未来視では、そう先のことまで見通すことはできないのだから。とりあえずいま視えているのは、これからこの男と魔法の撃ち合いになることくらいだ。

おまけに、僕の未来視は五割程度の確率でしか当たらない。そんなだから、兵士を大勢連れてくるってこともできなかった。そうそう、精度が低いってというのは、もしかしたら生まれつきのものではなく『渡来特典能力』だから、なのかもしれない。

しかし、そんなことは絶対に口には出さない僕。だって、そうだろう？　自分の能力の欠点を晒すことに、一体なんの意味がある？

黒ずくめの男は、少し沈黙してから絞りだすような声で、

「……未来は変わる。私の行動で、いくらでもな」

そう返してきたか。しかし、その返答はとりもなおさず、奴が『自分が勝利する』という未来を視ていないことを意味する。自分が敗北する未来が視えたのか、自分の意思で未来が視ることができないだけなのかは不明だが、いまは奴が自分の勝利を視れなかったことがわかっただけで充分だ。

足をひきずり、地面にある円の中に、爪先でガリツと最後の線を刻み込む。僕はニツと笑い、

「そうか。なら 変えてみな！」

左手に持った杖の先端を黒ずくめに突きつけた。そして素早く呪文を詠唱、自分を包む逆五芒星の魔法陣が輝きを放つのを見届けてから、

フレア・ショット  
「火炎弾！」

赤みがかった光球を放つ！

対する黒ずくめの男は必要最小限の動きでそれから身をかわしてみせる。彼の後ろのほうで響く爆音。

僕は、元いた世界では、『<sup>エキスパート</sup>専門家』やら『大賢者』やら『黒の魔道士』やらと呼ばれていたほどの呪文の使い手だ。剣や拳、脚を使<sup>うた</sup>った技と魔法を組み合わせて攻撃するなら、まさに敵なしと謳<sup>うた</sup>われていた。僕の存在を脅かすものなんて、僕の内側にある、隙あらば僕を呑み込もうとする『力』 『黒き魂』 くらいのものだった。

ただし、それはあくまで僕の元いた世界では、の話。この世界では『世界の意思』 ラグナーシャによって僕の魔力はかなり制限されており、魔法自体も神や魔族の力を借りたものや強力なものは唱えてもまったく発動しない。

これは、なんだかんだいって魔法に頼って戦術を組み立ててきた僕にとっては大きな痛手だった。そりゃ剣も体術も人並み以上には使えるけれど、やっぱり僕の一番の得意分野は魔法だったから。

それに、魔法を使うためには『力在于る言葉』の他に『杖』を始めとした、『力を管理し行使し調整する媒体』と『魔法陣』が必要という、この世界の『法則』も僕の枷<sup>かせ</sup>になっている。僕の世界では呪文の詠唱と『力在于る言葉』を口にするだけで術を使うことができたからだ。まあ、『魔法陣』の枷は、実はカナデのおかげで外すのに成功したのだけれど。

さて、奴は木製の杖こそ取り出したが、まだ魔法陣の準備を調<sup>しら</sup>えていない。いまのうちに魔法を連発して優位に立つておくとうしよう。そう考え、次の呪文の詠唱に入ると同時。

「 エクスプロード！」

「 なっ！？ 」

水に飛び込むような動きで地に倒れ込む僕。急ぎ地面を転がってその場から離れる。刹那の間を置いて、僕の立っていたところで大爆発が起こった。

び、びびった……！

判断を間違えていれば、いまので殺されていたんじゃないだろうか。

それにしても解せない。詠唱は小声でしていたのだろうけど、魔法陣なしでどうやって魔法を発動させた？

考え込む僕の脳裏に、ふとカナデとのやり取りがよみがえった。それは、僕がこの世界に来てから一<sup>ひと</sup>月ばかりが過ぎた頃のもの。

『ふうん、つまり、魔法陣なしで魔法を使いたいんだ？ でもさ、それは難しい相談だよ』

『やっぱり、無理なのか……？』

『そ、そんな肩を落とさないですよ。う、うん……。じゃあさじやあさ、わたしが考えてる方法、試してみる？ 成功は保証しなないけど』

『……実験台になれてることか？ 僕に』

『う、平たく言えば、そうなるかな。魔法が暴発しちゃう可能性もあるし……』

『……マジか。それでもまあ、乗ってやるよ。いまのままじゃ不便で仕方ないし』

『おお！ 生命の保証できないのに、それでもやってくれるんだ！ 度胸あるね！ それでこそ男の子だ！』

『ちよつと待て！ 生命の保証もないのか！？』

『あははっ、それは言葉のアヤだよ、さすがに。とにかく、お姉さんにすべて任せなさい！』

『不安だ。なんかすごい不安だ……。僕、とんでもない奴に救われちゃったんじゃないか……？』

もしかして、あのときカナデと僕が試した『あの方法』をあいっ

も使っているのか？　だとしたら身体のどこかに必ず『あれ』があるはず……。

注意深く、観察するように男を見る。……どこだ？　どこにある？

この世界で魔法を使うためには、杖と魔法陣が絶対必要。それを欠かせば魔法は発動しない。つまり『あの方法』は魔法陣を使わなくていい方法なのではなく

「あつた！」

広げた黒ずくめの左の掌。正確には、その手袋の掌部分<sup>グローブ</sup>。

そこに、淡く光を放つ、小さな魔法陣があつた。描かれているのは破邪を表す五芒星　ではなく、不均衡を意味する逆五芒星。僕が攻撃魔法を使うときに用いている魔法陣だ。そしてこれは僕の推測に過ぎないけれど、彼の右の掌には、僕が回復や援護の呪文を使う際に使用している、均衡を司る六芒星の魔法陣が描かれているんじゃないだろうか。

参ったな、これじゃ本当に条件は対等じゃないか。魔法陣が描かれている手袋を用いての戦闘スタイルは僕（正確にはリーゼンフォード一族）の専売特許だと思っていたのに。

僕は普段、手袋にある魔法陣と地面に描く魔法陣、その二つを同時に使つて魔法の威力をアップさせている。もちろん元いた世界で使っていたものの威力にはまるで届かないのだけれど、それでも少しはマシになるからだ。しかし、その方法も魔法陣が足元にはなければ使えない。

さて、どうする？

もう一度魔法陣を描くなんてのは論外だ。あれはさりげなく爪先で描いたからこそ描ききることができたのだから。いくら自分の身

体の一部が入る程度の小さな魔法陣でいいといっても、敵に注目された状態で描けるとは思えない。

なら、僕が元いた世界でやっていたように戦うしかないか。で、上手い具合に移動して、さっき描いた魔法陣のところに向かうとしよう。

方針を決め、僕は呪文の詠唱を

「死ぬ覚悟はできたか？ できたならば逝け。      サンダー・ストーム！」

弾かれるように駆け出す。バチバチと音を立て、数条の雷が大地に突き刺さる。

ちよ、ちよつと待てえっ！ あいつ、いま明らかに呪文の詠唱をしていなかったぞ！ 魔法陣を用いずに魔法を使える理由はわかったけど、これは一体どういう……！？

「ジャガーノート！」

背筋に悪寒が走り、急停止。刹那の間を置いて、目の前の地面がなにかに押し潰されたかのように陥没した。くそっ、いまのも詠唱なしか！ 本当、どんな仕掛けがあるんだ、あいつの魔法。『力ある言葉』を口にしてからのタイムラグがあるからかわせないってことはないけど、僕が圧倒的不利に陥っていることに変わりはない……っと、よし、こっちの詠唱も終わった！

ブラム・ストファッシュ  
「黒妖崩滅波！」

「テンペスト！」

僕が黒い波動を放つのと、黒ずくめが『力ある言葉』を発するのとは同時だった。

黒ずくめは波動を間一髪という感じでかわし、僕もまた、間を置いて具現した、雨粒を含む嵐から身を遠ざける。

しかし、こっちが魔法を一回使うまでの間に、黒ずくめは大体、三回魔法を使ってくるのか。これだと近づくことすらままならないから、剣や蹴りで奴を牽制するのも難しいな。

そもそもこいつ、『詠唱の必要ない魔法』なんて便利なものが使えるのに、どうして国に仕えることを選ばずに姫をさらったりしたんだ？ どうもそのあたりが繋がっている気がしてならない。

……ん？ 待てよ。でもこいつは無敵か？ 最強か？

これは奴が『来訪者』であることを前提とした推測だけど、奴に欠点 制限を受けている部分はないのか？

はつきり言つて、こいつの魔法はかなりの威力を持っている。その種類だっていまの戦いで見た限り、広範囲を攻撃するものから一点集中のタイプまで存在している。

奴の魔法が詠唱を必要としないのは、『そういう類の術式だから』としていいだろう。きっと、奴が元いた世界では、魔法を使うのに詠唱を用いる必要なんてなかったんだ。

呪文の詠唱が不要で高威力、しかも種類も豊富。こいつが一流の魔法使いであることは認めよう。

でも、こいつにだって欠点はちゃんと存在しているはず。たとえば……そう、『命中率』とか。

と、そこまで考えて、ピンときた。試しにそれを口に出してみる。

「さてはお前、来訪者だろ？ それも、元いた世界ではもつと

強力な魔法を使え、しかも『力ある言葉』の発音から魔法の発動までのタイムラグが一切ない、優秀な魔法使いだった。　　違うか？」

そう、おそらくはその『タイムラグ』こそがあいつの欠点。制限を受けている部分。どんなに強力でも広範囲でも、多少のタイムラグがある以上、正面きつて当てるのはかなり難しくなるから。

もちろん、相手が一般人ならそんなことはないだろう。でも僕のように戦うことを生業なりわいとしている人間相手では、そのタイムラグが致命的なまでの欠点になるのだ。

「……………」

黒ずくめは無言。僕はじりじりと足を動かしながら続ける。

「お前が来訪者だっていうのなら、いや、元いた世界に帰りたいがつている来訪者だっていう推測が当たっているのなら、姫をさらった理由もなんとなく見当がつくよ」

そこまで言つて口を閉ざす。僕は自分の推測をべらべらとまくしたてるのがあまり好きじゃない。だって、もし違っていたら恥ずかしいじゃないか。

でも、見当がついたのは本当だ。こいつはきつと、元の世界に戻るため、ラグナーシャに『不利益をもたらす存在』と認識されたかったんだ。だから姫をさらった。いや、もしかしたら『生贄』に手を出そうという考えも持っているかもしれない。

でも、僕は知っている。ラグナーシャというのは僕たちが思っている以上に懐の大きい存在だ。だって、僕が『黒き魂』に『吞まれた』ときですら、僕を『不利益をもたらす存在』と認識しなかったんだから。



呪文の詠唱をしつつ、じりじりと足を動かし続け、剣の届く範囲よりも少だけ遠いところまで奴に近づいた僕は、一足で間合いを詰め、牽制の意味で剣を振るった。

しかし、これはかわされる。続いて放った蹴りも同じ。詠唱時間を稼ぐための攻撃だから、かわされてもさして問題はないのだが、こうまで攻撃をかわしてみせる奴の身のこなしには正直、驚かされた。魔法使いにしては、かなり体術が使えるほうなんじゃないかと、そんなことを思った次の瞬間。

「ぐっ!？」

ドスツという音と共に、黒ずくめの蹴りが僕の腹にめり込んだ。

「ルアルドっ!」

叫ぶ姫の声が遠く聴こえる。僕は痛みをこらえきれずに地面へと転がった。当然、呪文の詠唱は中断せざるをえない。ケホケホと咳が口から何度も出た。

や、やばっ………!

恥ずかしい話だけれど、僕には痛みに対するこらえ性がなかった。一発でもまともにもらえば、戦闘能力が激減してしまうのだ。こらえきれない痛みがあると精神を集中させることも難しくなるから、魔法も技も使えなくなってしまうし。

これは、もう一度『黒き魂』の『力』を使ってなんとかするしかないか……？

さっきだってそうだったのだけど、この『力』は実を言うと、も

う絶対に使いたくはないものだった。だって、『以前使ったときは、たまたま大丈夫だっただけなのではないか』という疑念が拭いきれていないのだから。そう、今度こそ『力』の使用と同時に、この世界から弾かれてしまいかもしれない。

この世界に來たばかりの頃ならいざ知らず、いまの僕はこの世界を去りたいとは思っていない。当たり前だろう？　ここには僕が大切に思う『あいするひと婚約者』がいるのだから。

しかし、それでもここで黒ずくめに殺されれば、そのカナデとも二度と会えなくなってしまう。だったら……。

そこまで考えたとき。僕の親友　ユンという名の青年が口にしていたことが思い出された。

『ボクたちはすぐ、それが当たり前のことのように錯覚しちゃうけどさ。待っていてくれる人がいるということ、出かけていった人が帰ってきてくれること、それって本当は涙が出ちゃうくらい嬉しいことなんだよね。』

お互いがそこにいる。存在することを許されている。それはさ、なんていうか、奇跡みたいなものだから』

確かに、その通りだ。

そうだ。カナデが　待っていてくれる人がいる限り、僕は何度でもリスクを負おう。ラグナーシャに拒絶され、別の世界に弾かれるかもしれないこの黒き力で、何度でもその当たり前でちっぽけなけれど彼女が望んでくれる奇跡を起こしてみせよう。

その決意を胸に、地に伏したまま、再び『自分の内側』に意識を向ける。そして黒ずくめを視界に収め、呟いた。

「 殲滅対象認定」

ルアルド・デベロッパがこの世界にやってきたのは約十ヶ月前、カナデ・リーゼンフォードがやってきたのは七年前 『祭典計画』を発案したときから数えるなら六年前 のことだった。

「 ここはどこだ？ カーツァ・アーク＜万理断章＞はちゃんと発動したようだけど……」

少し痛むのか、頭を押さえながら呟く彼に、短く切り揃えられている茶色がかった髪を揺らし、カナデは答える。

「ここはディリトリシア王国だよ。正確にはその王都からちょっと離れた街道だけだ」

「ディリトリシア王国……。街道……」

「うん、そう。で、きみは来訪者だと思う」

言ってカナデは愛らしい笑顔を見せた。それは十代後半の少女のそれを思わせる、無邪気かつ元気な笑顔。実年齢は二十二歳であるカナデの笑顔からそんな印象を受けてしまうのは、やはり彼女がかなりの童顔・低身長であるということに起因しているのだろう。

まあ、それはそれとして。

「来訪者……？」

「グルルウ……！」

訊き返すと同時、少し遠くから何者かの唸り声が聞こえてきた。ルアルドは眉をひそめ、カナデは少し身を強張らせて、その何者かを視界に収める。

それは二足歩行をするトカゲのような生物だった。背は平均的な成人男性のそれと同じくらいだろうか。身体の色は緑。戦う際に武器として用いるのか、両の手にある爪は鋭くとがっている。

「モンスター？ リザードマンか？」

「違う。グリーンドラゴンっていう魔物だよ……！」

呑気に呟くルアルド。額に汗を浮かべるカナデ。両者のリアクションはまったく正反対のものだった。

「逃げる算段を考えないと……。街に張つてある防壁魔法のおかげで、街に魔物が入り込むことはまずないから、街の中に飛び込みさえすればなんとか……！」

ねえ、ちゃんと走れる？ 腰抜かしてない？」

気遣わしげな表情を見せる彼女に、ルアルドは微笑を返した。

「大丈夫。ところで、あの魔物は倒しちゃってもいいんだよね？」

「え？ それはもちろん、倒せるならそのほうが助かるけど。あ、そういえば、口ぶりからして魔物を怖がってる感じしないね。」

もしかして、きみの元いた世界にも魔物がいたとか？」

「ああ。いたよ、すっかりと。でもってどんな奴も俺の敵じゃあなかった」

「おおっ！ それは安心！ 本当、すつごく助かるよ！」

パアツと表情を輝かせるカナデ。ルアルドはそれにかまわず、一人ごちる。

「それにしても、『元いた世界』か。どうやら<万理断章><sup>カーツァ・アーク</sup>による世界移動は成功したみたいだな。戻ったらすぐにレポート書いて提出するか」

「あつ！ くるよ！」

「ほいほい。じゃあ、そうだな……」

素早く呪文を詠唱。それは彼が住んでいた世界の『魔王』の力を借りるためのものだった。

『力ある言葉』を大声で叫んでグリーンドラゴンへと手をかざす。しかし、その掌から飛び出すものはなにもない。

「あれ……？」

「ど、どうしたの……？」

わずかに青ざめる二人。けれど顔を見合わせるなんて無駄な動きはすることなく、ルアルドは再び呪文の詠唱にとりかかった。

しかし、魔物が簡単に呪文を唱える時間を与えてくれるわけがな

い。グリーンドラゴンは爪を武器にルアルドへと突っ込んできた。

「あつ、危ない！」

悲鳴を上げるカナデにルアルドは舌打ちひとつ。いつもよりも鈍く、重くさえ感じられる身体に少しだけ苛立ちを覚えながら、それでも横っ飛びに跳んで魔物の攻撃をかわす。

これは牽制のために剣を使う必要もあるか？ いや、別に魔術にこだわる必要はないんだ、剣術や体術だけで倒してしまったってかまわない。

そんな風に考えを巡らせながら腰に手をやった瞬間、彼はようやく自分が剣を携えていないことに気づいた。

「嘘だろ、おい……！」

思わず口を突いて出る言葉。一瞬遅れて、詠唱を中断させてしまったことを悔やむ。

そこからは思考をフル回転させた。

『魔王』の力を借りた術が発動しなかったのは、ここが自分がいた世界ではないからだ。なら、神の力を借りた術だって発動はしないだろう。使うなら精霊魔術か黒魔術。

グリーンドラゴンの攻撃を辛くもかわしながら、ルアルドは三度、呪文の詠唱にとりかかった。使うのは黒魔術。この世界に精霊の力が働いていない場合、精霊魔術だと発動しない可能性があるから。

魔物の攻撃をかくぐり、どうにも反応の鈍い身体を懸命に動かして、ときには蹴りを、ときには拳まで放って時間を稼ぐ。

とても長く感じられる十数秒が過ぎた。ようやく呪文が完成し、

自分の魔力にのみ依存するこの術なら間違いなく発動するという確信を持って『力ある言葉』を発音する。

しかし、それは発動しなかった。

その事実には、ルアルドは呆然と立ち尽くす。

横合いから、カナデの声。それは、まるで絶叫にも似た

「ちよつと！ 杖も魔法陣も使わないで、さっきからなにやってるの！」

絶望にも似た感情から、身体の動きを止めてしまうルアルド。さっきまであんなに必死になって動かしていたというのに。

グリーンドラゴンの爪が、力の抜けた彼の右腕を捉える。迫りくるそれをぼんやりと眺めながら、彼は疑問に思った。

杖？ 魔法陣？ なんてそんなのを使う必要が……？

ルアルドの身体が吹っ飛ばされる。カナデの足元に転がった彼の瞳にあったのは、驚きと疑問の色だけ。

「つ……！」

殺される。このままでは、この魔物に二人とも殺される。

これから数秒後に起こりうるであろう、外れる余地のない未来の予想。カナデがそれを抱いた刹那。

「はっ！」

柔らかな髪色をした、ルアルドと同年齢くらいの青年が、細身の剣を片手にグリーンドラゴンへと飛びかかった。突然のことに二人の思考は数秒間、停止する。

それでも、理解できることはあった。

ルアルドにとってのそれは、自分は弱くなったのだ、という認めざるをえない現実。

そしてカナデにとってのそれは、助けに入ってくれた青年は自分がよく知る人物　　ユン・リーゼンフォードであるという事実。

カナデは力の限り、軍に籍を置いている青年の名を呼んだ。

「　　ユンユン！」

……ただし、彼女が独特のネーミングセンスでつけた、とっておきのあだ名で。

街に運び込まれ、ルアルドはカナデとユンから様々なことを教えられた。

大はラグナーシャという存在のことから、小はこの世界では魔術のことを『魔法』と呼んでいることまで。

「……と、まあ、こんなところかな。理解できた？　ルウ」



「る、ルウ……？」

思わず間の抜けた声を出してしまうルアルド。カナデは少し間延びした声を作り、「だ〜か〜らあ〜」と可愛らしく人差し指を振ってみせた。

「ルアルドだから『ルウ』。これから同じ世界に住むことになる仲間でしょ？ だったら親しみの籠もった名前で呼びたいじゃん」

「……………」

ムスツとルアルドは黙り込む。彼にはこの世界に永住するつもりはないのだ。魔術 この世界では『魔法』だったか で元いた世界に帰らなければならない。

けれど、ムスツとする一方で、じんわりと心地のいい『なにか』が胸の奥に広がったのも事実だった。

『仲間』。

自分から誰かにそう言っただけのことでは数え切れないほどあるが、誰かにそう言ってもらったのは、思えば、初めてのことでなかっただろうか。

二週間後。

治癒魔法によって本調子に戻った彼は、それでもまだ反応が鈍い身体に苛立ちを覚えながら、先日ふと思いついたことを実行に移すために王宮前へとやってきていた。

思いついたことというのは他でもない、元の世界に帰る方法だ。それはつまり、自分の中にある『黒き魂』を限界　正気を保っていられる三分間を超えて使ってみるというもの。自分から『黒き魂』に敗れて『吞まれて』みる　周囲の者を『破壊』することしか考えられない状態になってみるというもの。

上手くいくかどうかはわからない。そもそも、ラグナーシャに『この世界に不利益をもたらす存在』と認識されて世界から弾かれても、それで元の世界に帰れる保証もないのだ。

それでも、いままで通りの魔法が使える世界に飛ばされさえすれば、その世界で<万理断章>を使い、元の世界に帰ることはできるはず。

王宮の周辺には現在、あまり人はいない。視界に映るのはほんの数名ほどの一般人と、ときどき王宮に出入りする兵士の姿くらいのもの。

最初は、人気のないところで試すべきかとも考えた。

しかし『黒き魂』は破壊衝動の塊である。『吞まれた』とき、周囲に誰もいなければ、きつと『壊す』べき『人間』の姿を追い求め、最悪、一般人を何人も殺してしまうことになるだろう。それなら、最初から破壊衝動を向ける相手　兵士がすぐ近くにいる場所で『吞まれ』たほうがいい。幸か不幸か、いまの自分は身体能力がなぜか劣ってしまっているのだし。

欲を言えば、戦う相手はこの王国の三大將軍の誰かであってほしかった。『闘将』、『知将』、『猛将』の異名を持つ彼らの中の誰か。その三人のうちの誰かなら、あるいは怪我をせずに『吞まれた』自分をいなししてくれるかもしれないから。

いずれ三大將軍の異名を継ぐだろうと言われている三人のうち  
の誰かでも、いいとは思うけどな。

それは次代の『闘将』と目されているアルトゥール・ボーデンシ  
ヤッツ、同じく『知将』になると思われているホラント・ベルク、  
そして『猛将』を継ぐであろうレオンハルト・バルシュミードとい  
う三人の武人のこと。まあ、次期『知将』の候補にはユン・リーゼ  
ンフォードの名前も挙がっているらしいが。

ルアルドはユンのお古だという長剣を構え、意識を『自分の内側』  
へと向けた。

「 殲滅対象認定」

心がざわめき、凶暴な衝動が湧き上がってくる。  
ふと、昂ぶる感情の波に揺られながら、

これから兵士相手に騒ぎを起こして……。このことを知った  
ら、カナデは悲しむだろうな……。

などという意味のないことを考えた。同時に、カナデがときどき  
見せる沈んだ表情を思い出す。あれは自分の正しさを疑うときに人  
が見せるもの、決して軽くはない責任を負った者の表情だ。ルアル  
ドにはわかる、自分も何度となく重い責任を背負って生きてきたの  
だから。

彼女が自分に見せたあの表情は、以前、彼女から聞いた『祭典計  
画』に関係しているのだろうか。もっとも自分はもうすぐこの世界  
から立ち去る身。いくらカナデのことが気になろうと、どうしてや

することもできないわけだが。

やがて一分が経ち、二分が過ぎ、『黒き魂』の『力』を使用してからもうすぐ三分になるといふとき。

王宮から二十代前半くらいの黒髪の青年が出てきた。

自分が正気を保てているうちに、とルアルドは彼の前に躍り出て、挑戦状を叩きつける。彼の名は確か

「俺と勝負しろ！ 闘将アルトゥール！」

「……いきなりなんだ？ そもそも俺はまだ將軍になったわけでは……。ふむ、お前は確か、何日か前に渡来してきた奴だったな。まだリーゼンフォード姓を名乗っていないと聞いたが」

「うるさい！ いくぞっ！」

その言葉を最後に、ルアルドの正気は完全に消え去った。

一瞬にして間合いを詰めた彼の剣が振るわれる。

しかし、それは抜き払われたアルトゥールの剣によって弾かれた。さすがは次代の『闘将』と目される男、ただの兵士に比べ、攻撃への反応が異常なほどに速い。身体が悲鳴を上げるような無理な動きで死角を突こうとするも、これもやはり防がれてしまう。

「スピードはかなりのものだな。だが力任せに剣を振るうだけでは、野にいる獣とさして変わらんぞ」

教え、諭すようなアルトゥールの物言い。それは弟子に稽古をつけてやる師匠のそのよう。

もちろんいまのルアルドは、その言葉が届く状態にない。目の前の敵を壊そうとがむしやりに剣を振り回し、ときに蹴りを放つ。そのことごとくをアルトウールは表情を変えず、息を乱すこともなくいなしていった。

「死角を突こうとするばかりで、相手の隙を作りだす攻撃の組み立てができていない。無理な体勢からでも攻撃を繰り出せること、その攻撃が必殺の鋭さを持っていること、見るべきところは確かにあるが、相手に当たらないのでは、それも宝の持ち腐れだ」

「うるせえ、黙れっ！」

アルトウールの言っていることはまさしくその通り。『黒き魂』に『吞まれて』いる状態のルアルドは、『不殺』の信念から生まれた、普段ならある『できる限り相手に怪我させたくない』という気持ちを持たない。そのため攻撃から『ためらい』がなくなり、普段よりも鋭い一撃を繰り出せるようになるのだが、反面、常に破壊衝動に身を任せているため、冷静な判断や精神を集中させることが不可能になる。

つまり、この状態だと攻撃を組み立てることはおろか、『技』や『魔法』を使うことすらできなくなるのだ。

とはいえ、すべての『技』が使えなくなるわけではない。『黒き魂』の『力』を使用しているときにのみ使える特殊な『技』なら二つだけ、使うこともできる。

「滅！」

これがそのひとつ。アルトウールに向けた掌からく黒妖崩滅波ブラム・ストラッシュのそれに似た、けれど明らかに性質の違う黒い波動が放たれる。

不意をつかれ、わずかにバランスを崩しながら黒の波動をかわす  
次期闘将。

「魔法だと！？ 魔法陣も杖もないのに！？」

魔法ではない。技なのだ。それも自分の中にある力を外に撃ちだしただけに過ぎない。攻撃方法としては、アルトウールでいうところの『剣を振るう』と意識の上では大差のないものなのだ。

もちろんルアルドにそんなことを口に出して説明してやるつもりはない。いや、してやりたくてもできない。衝動に身を任せ、身体を泳がせたアルトウールの腹めがけて素早く蹴りを叩き込む。

「……っ！」

声は押し殺したようだったが、多少は堪えた<sup>こた</sup>のだろう。彼の表情が苦悶に歪む。この状態の唯一の取り柄といえるスピードを活かし、剣と蹴りを次々と、しかしメチャクチャに浴びせていくルアルド。

「はっ！ ざまあねえな！」

アルトウールが地面に膝をついてうずくまったあたりで、ルアルドはそう吐き捨てて猛攻を終える。最後に『滅』で消し飛ばしてやるのと、距離をとるため背を向けた。

それが、彼の隙となる。

「ふっ！」

アルトウールの持つ剣が一閃。ルアルドの左のふくらはぎを横に斬り払った。

「なっ！？ き、汚ねえぞ、てめえ！」

しかしルアルドが表情を歪めることはない。痛みを感じていないのだから当然といえば当然のことではある。それでも脚に怪我を負ったのだ、彼の動きは確実に鈍った。

このままでは負けると思ったルアルドは、ほとんど反射的に固まっている数人の一般<sup>ギャラー</sup>人のところへと駆ける。アルトウールが『逃げる』と叫ぼうとしたが、さきほどの一閃そのものが、すでに死力をふり絞つてのもの。彼はなにも言葉にできず、血を吐いて咳き込んだ。

ルアルドが一般人のところに辿り着く。勝利を揺るぎないものにするべく、そこにいた女性の喉に剣をあてた。もちろんアルトウールを葬ったあとは彼女も殺すつもりだ。『吞まれた』ルアルドに『誰は生かす、誰は殺す』というような分別などありはしない。

そう、ありはしないはずだった。

「これ、なに……？ なんなの？ ルウ？」

女性の声。他でもない、自分が剣を向けた女性が発した声。

そして、その呼び方は。

わずかに怯えた表情で、少しだけ震える声で、彼女は続ける。

「……ルウ？ 大丈夫？ ねえ、一体なにがあったの？ 因縁でもつけられたの？ それでキレちゃってるとか、そういうことなの…

…？」

怯えては、いるけれど。

震えても、いるけれど。

それでも彼女　カナデはルアルドに理解を示してくれていた。  
『だって、ルアルドは自分から騒ぎを起こすようなことはないもん』と、その目で語ってくれていた。そのルアルドの手で喉元に剣をあてられていながら、なお。

「カナデ……」

不思議なことに。

破壊衝動が鎮まっていく。

いつもの穏やかな自分に戻っていく。

剣を下ろし、彼は苦笑交じりに呟いた。

「だから、なんで『ルウ』なんだよ……」

そして「あ、正氣に戻った」と笑うカナデに「もっと他にあるだろ」とつられるように笑いかけようとして

「　　たっ！」

後ろから、衝撃。

誰の攻撃だったのか確かめることもできず、ルアルドは地面に沈



み、気絶する。

ルアルドを気絶させた青年　　ユンにカナデは詰め寄った。正気を取り戻していたのに、どうして、と。

ユンはそれに静かに返す。

「それでもここで暴れていたのは事実でしょ？　おまけにアルトゥールさんまで倒しちゃったし。また暴れださないと制限らないから、ちよつと当て身を食らわせて眠ってもらったんだよ。

目を覚ましたら、ちゃんと事情を話してもらおう。どうしてこんなことになったのか」

あまりの正論に、カナデは無言でうなずくしかなかった。

目を覚ましたルアルドは、ユンに意外なほど優しく問いかけられ、『黒き魂』を始めとした、こうなるに至った経緯と理由をすべて話した。たとえこれで『ルアルドは得体の知れない存在』と怖がられても、それは仕方がないこと、と少し寂しく思いながら。

「なるほどね。元の世界に帰るため、か。でも人を一人や二人殺す程度じゃ、多分『不利益な存在』とは見なされないと思うよ？

ほら、ここは平和な国だけどさ、それでも来訪者が王族の人間に危害を加えるってことはたまにあつて。それでもその来訪者は投獄されるだけでこの世界から弾かれたりはしないんだよね。弾かれたかったら、それこそ大虐殺くらいはやらないと」

ユンのあとをカナデが継ぐ。

「そうそう。少なくとも『誰も殺したくないんです』なんて言うてるうちは、世界から弾かれるなんてこと、まずないだろうねえ」

『黒き魂』の『力』を使うこと、それ自体が『世界の不利益』に繋がるのでは、とルアルドは思ってたのだが、それは黙っておくことにした。

そんな彼の内心の言葉には気づかずに、もっともらしく『うんうん』とうなずいているカナデ。それがあまりにもいつもと変わらないう仕草だったものだから、ルアルドはつい尋ねてしまう。

「あのさ、僕のこと怖くないのか？ ほら、いくら『吞まれ』てたから記憶が半分くらい飛んではいえ、カナデに剣を向けた事実には変わらないだろ？」

するとカナデはきよとした表情になって、軽く首を傾げてみせた。

「ん？ 別に怖くなんかないよ。そりゃ、本当にルウの意思と無関係に、いきなりあんな風になっちゃうんだったら怖いかもしれないけどさ、でも最初の三分間は正気のままでいられるんでしょ？ だったら問題ナッシング！」

グッ！ と親指を立てられた。

「それに、何度も言うようだけど、同じ世界に住む仲間だからね。ねえ？ ユン」

振られたユンは微妙な表情。

「そうだね。……いや、怖くはあるけどね。でも怖がってるだけの関係でいたいとも、思わないな。だって、そんなの寂しいじゃない」

「寂しい、か……」

「うん、そう。寂しい。ついでに言うなら、もう二週間も経つのに、まだリーゼンフォード姓を名乗ってくれないのも、ちょっと寂しいかな」

リーゼンフォード姓。それはきつと、別々の世界からやってきた者たちを繋ぐ、絆のようなものだろう。違う世界で生まれ、育ってきた者たちだから、リーゼンフォード姓という共通点を作り、自分たちを『同じ存在』と定義したいと願い、そうしたのだ。きつと。

それを理解したルアルドは、

「そうだな。確かにもう二週間も経ったんだし、この世界から弾かれることもできないようだし、そろそろリーゼンフォード姓を名乗って、この世界で生きていこうって思うべきなんだろうな。」

でもさ、ユン。仕事とかはどうすればいいんだ？」

「ん、そうだね。あのアルトゥールさんと互角かそれ以上に戦えるんだから、兵士なんてのはどう？」

ユンの提案に、しかしルアルドは難色を示す。

「兵士か……。でもあの人を倒せたのは『黒き魂』の『力』を使ったからこそだぞ。正直、あの力を使う気は僕にはもうないし、つ

け加えるなら魔法だっていまの僕には使えない。剣や体術なら一応、それなりにはできるけど、この世界に来てからは、どうも身体が重いつていうか、動きが鈍くなってるし……」

「身体が重くて、鈍い？ ああ、本来の能力が制限されちゃってるんだね。わかるよ、僕もそうだから。でも大丈夫、徐々に慣れるって。」

それに、能力が制限された状態でもいいんだよ。大事なのはその心のあり様。『不殺の信念』を持っているってだけで、きっと他の兵士とは違う働きを見せてくれるって、ボクは思うからさ」

「……そうか。じゃあ、当分はその方向で頑張ってみるかな。よろしく、ユン」

「うん、よろしくね。アルちゃん」

「また出たよ、妙なあだ名！ 一応訊くけど、なんでアル？ そして『ちゃん』づけ？」

「うん？ そりゃもちろん『ルアルド』からとったんだよ。真ん中の部分を。『ちゃん』づけは親しみを籠める意味で」

「カナデもそうだけど、そのネーミングセンスなんかしろよ！ 次に来訪者が来たとき、そういう妙なあだ名をつけたら絶対戸惑われるって！」

「えー、そうかなあ？ ユンユン」

「そんなことないよねえ？ ボクだって『ユンユン』って呼ばれるの、悪い気しないし」

顔を見合わせ、そんなことを言う二人をジト目で見ながら。

ダメだこいつら！ 早くなんとかしないと！

ルアルドはそんな風に思ったのだった。

「  
殲滅対象認定」

その眩きが発せられると同時に。

ルアルドの瞳に暗い色が灯った。

それは、どこまでも暗く暗く昏く昏く。  
。

背筋に震えが走り、黒ずくめの男は反射的に魔法を使う。たとえ苦もなくかわされるとわかっていても、使わずにはいられなかった。

「  
ジャガーノート！」

めきめきつ、と大地が悲鳴を上げた。そう、その場にいたルアルドの身体と共に。

「……っ!？」

驚愕のうめきが漏れたのは、黒ずくめのほうの口から。なぜ余裕

でかわせるはずの<ジャガーノート>を彼はかわさなかったのか、と。

見えない圧力に押し潰され、片膝をついていたルアルドが立ち上がる。その瞳に宿るは狂気にも似た昏い歓喜の色。

ニヤリと邪悪な笑みを見せたルアルドが、一瞬の間すら置かずに突っ込んでくる。懐に入るのを許してしまったと同時に、右の剣が振るわれた。

かろうじて一撃をかわし、黒ずくめは思う。

蹴りひとつで地面に沈んでいた奴はどこにいった!?

<ジャガーノート>をともに食らったにもかかわらず、いまのルアルドにはまるで堪えた様子がみられない。スピードがさっきまでよりも遙かに速くなっているし、攻撃だって異常に鋭い。まるで、まったくの別人を相手にしているかのようなだった。

と、杖を放り捨てたルアルドの左の掌が黒ずくめの胸元に向けられる。そして

「滅」

まさかの、容赦のないゼロ距離発射。

無感情な、それゆえに恐ろしい印象を受ける眩きと共に放たれた黒い波動に、彼は遠くまで吹っ飛ばされ、尻餅をついた。

黒ずくめの耳にリスタシアの漏らした言葉が聞こえてくる。

「これが、例の『力』……?」

例の、などと言われても黒ずくめにはわかりようがない。理解できるのは、目の前にいる悪魔のような青年が自分の命を狙っている

という事実だけ。

そう、悪魔だ。あれを悪魔と呼ばずしてなんと呼ぼう。

その悪魔が地を駆ける。彼が『殲滅』する『対象』に『認定』した黒ずくめに向かつて。

「ひっ!？」

そこに至って初めて、黒ずくめは情けない声を上げてしまった。心が折れ、膝がガクガクと震える。

殺される！

立ち上がることもできないまま、けれど両腕を交差させ、攻撃から頭部を守ろうとする黒ずくめ。一瞬ののち、その交差させたうちの右腕が掴まれ、軽く力が込められる。覚えたのは浮遊感。わずかではあるものの、黒ずくめの身体は地面から離れていた。

「殺」

そして漏れる無感情な呟き。刹那、黒ずくめの内側に『なにか』が叩き込まれる。

それは『黒き魂』の『力』そのもの。『黒き魂』が右腕から黒ずくめの全身に行き渡って、内側で暴れまわり、彼の『魂』を傷つける。

「あ、がつ……!？」

内側からの弾けるような痛みに、黒ずくめはただただ悶えた。そ

うすることしかできなかった。

もつとも、『黒き魂』の『力』が暴れまわったのは、ほんの数瞬のこと。ゆえに彼を襲ったのは、耐えられないほどの苦痛というほどのものではなかったのだが。

どさり、と身体が地面に下ろされる。それにわずかな安堵を覚える間もなく、蹴りを一発、二発と両の脚でほぼ同時に見舞われた。

すぐさま体勢を直すルアルド。とどめをさそうというのか、剣を手にしたままの右の拳がさらに硬く握られる。だが剣で斬り刻むつもりはないらしい。彼はあくまで拳のほうをこちらに向けていた。

硬く握られた拳が振ってくる。その光景に黒ずくめが息を呑んだ。アリスタシアも、また。

そして。

ぼきっ、という嫌な音が辺りに響き渡った。

拳から いや、全身から力を抜き、昂ぶっていた感情を落ち着かせるために深呼吸をしてから、僕は剣を鞘に収めた。途中で投げ出してしまった杖はまだ取りにいかない。だって、まだこの黒ずくめの男は生きているのだから。

まあ、もつとも。

『殺』を叩き込み、魔法を使うために必要な木製の杖も『ぼきっ』と折ってやったんだ。正直、こいつにこれ以上の抵抗ができるとは



思えない。ちなみに、二発ほど蹴りを見舞いもしたけど、あれはいわゆる勢いでやってしまったものだ。あそこで蹴りを入れるつもりは、本当はなかった。

それにしても、身体のうちこちが痛くて仕方がない。言うまでもなく、さつきくジャガーノート>を食らったときに生まれた痛みだ。『力』を使っている最中は痛みを感じないけど、元の状態に戻れば当然、痛みも戻ってくるんだよなあ……。まあ、『生きている証拠』と前向きに捉えておこう。

あ、そうそう、黒ずくめのくジャガーノート>だけど、かわそうと思えばもちろんかわせた。それをしなかったのは、ちよつと確かめたいことがあったからだ。

元いた世界で『黒き魂』の『力』を使うと、その『力』の副産物なのかなんなのか、僕の半径二メートルくらいには『絶対領域』という一種の結界ができていた。それはその範囲内であれば、風の吹く向きや重力の働く方向を始めとしたあらゆる事柄を、僕にとってプラスに働かせることのできる領域。ちよつと御幣ごへいのある言い方をするなら、すべてを自分の思うがままにできる能力だ。ゆえに、その領域内なら僕には絶対に死は訪れない。誰かと戦って殺されることはなかったのだ。

これが破られるのは、同じく『絶対領域』を持つ存在　僕と同じ『天上存在』　がその範囲を僕の領域の範囲に被せてきたときだけ。そのときだけ、『絶対領域』は無効化される。

でも僕は『天上存在』の中でも特に強い『力』を持つ人間だったらしいから、『吞まれた』ときの僕を止めるには、いつもいつも仲間が数人がかりで『絶対領域』を無効化してくれていた。

しかし、今回の<ジャガーノート>しかり、いまは闘将の地位についたアルトゥール將軍に脚を斬られたときしかり、どうも僕の『絶対領域』は、この世界では発動してないらしい。まあ、それならそれでかまわないんだけどさ。僕はただ、発動するのかしないのか、それをちゃんと確かめておきたかっただけだから。いや、だってもったいないじゃないか、世界から弾かれる可能性も踏まえた上で『力』を使っただから、その確認くらいはやってしておかないと。

なににせよ、『絶対領域』は発動しなかった。そして僕が世界から弾かれることもなかったし、黒ずくめを捕まえ、アリスシアさまを救出することもできた。うん、めでたしめでたしだ。

と、黒ずくめが地面を這い、僕が一番最初に弾き飛ばした短剣に手を伸ばした。なんだなんだ、まだ抵抗しようつてのか？

なにをどうしても無駄だと思っただけだなあ、と思っただ瞬間。彼の両の掌が眩い光を放った。

これは、魔法！？ でももう杖は

「テ、レポ―……ト……」

弱々しく、それだけを呟いて黒ずくめは姿を消した。悪役然とした捨てゼリフすら吐かずに。よほど余裕がなかったとみえる。

いや、そんなことよりも、だ。

「うわ、やられた！」

「ど、どうなってますの！？」

舌打ちしてから姫に顔を向ける。

「あの短剣、魔法を使うための媒体だったんですよ！ よくよく考えてみたら、発動媒体に杖以外の物　たとえば小剣とか使っている奴ってディリトリシアにもいますもん！」

ああ、参った。最後の最後でやられた。油断してたといつてもいい。

両のグローブが光ったのは、逆五芒星と六芒星の魔法陣を同時に使ったからだろう。レポートは均衡を崩す力と保つ力、両方を使う必要があるから。

「　まあ、いつまでも悔しがっていても仕方ありません。アビゲイルさまと合流して王宮に戻りましょう、姫」

「え？　ええ、そうですね」

そうして、僕たちは帰路につく。途中でアビゲイルさまと合流し、王宮に到着したのは、太陽が西の空に沈もうかという頃のことだった。

### 黒ずくめの男。

魔法使いでありながら、彼は僕の『それなり』の剣や体術を見事にかわしてみせた。

あいつとは必ず、またどこかで相まみえることになるだろう。だから僕は、そのときまでユンに稽古をつけてもらい、剣の技量を上げておこうと思う。

奴と再び対峙したとき、もう『黒き魂』なんていう忌むべき『力』なんかに頼らなくても済むように。

彼女のためだけに動く彼は、穏やかさと激しさを併せ持つ人だった（後書き）

作者：ルーラー

波紋の広がることのない、けれど波ある心を持っていたいと彼女は願う

波紋のない、けれど変化がないわけではない、たゆたう水面。みなも

他者の綺麗などころも醜いところも、全部笑顔で受け入れられる。感情が激しく動きはするけど、決して爆発はしない。

そんな人間で、わたしはありたい。

夕焼けによって赤く染まった街を、僕はアリスシアさまとアビゲイルさまを伴って歩いていく。姫たちを王宮に送り届ければ今日の仕事は終了。あとは心置きなくカナデといちゃつけるはず。

そんなことを考えながら歩を進めていると、街の中心にある噴水が目に入ってきた。そしてそこには、噴水から少し離れて立っている少女の後ろ姿もある。

短く切り揃えられている茶色がかつた髪。お世辞にも平均に達しているとはいえない身長。彼女が誰か、それだけの特徴で僕にはすぐにはわかった。ありやカナデだ。

ふと、イタズラ心が首をもたげた。人差し指を立てる仕草で後ろの二人に『静かに』と伝え、そろりそろりと背後からカナデに近づいていく。もちろん気配は完全に消して、だ。

そして

「よっ、カーナデっ！」

彼女の背後からがばっと抱きついた。ちなみに、身長差がけつこ  
うあるため、抱きすくめるといつか、後ろから包む込む感じになっ  
ていたりする。

カナデはくると顔だけでこちらに振り向いて、

「あ、お帰り、ルウ。無事に帰って来れたようだなによりだよ」

驚きもなく、照れた様子も見せず、にぱつと無邪気な笑顔を浮か  
べてみせた。頬が少しだけ赤く染まってはいるが、それはもちろん  
夕日のせい。

そう、よく夕焼けで頬が赤く染まっているように見えて、実は…  
…、みたいな展開を本で見かけはするが、これは正真正銘、夕焼け  
によるものだ。彼女曰く、不意に抱きつかれるのには基本、慣れて  
るのだとか。

しかし、僕ひとりが（若干とはいえ）照れているというのは、な  
んとなく悔しい。

なのでカナデの両肩に手を置いて、全身をこちらに向かせた。そ  
れから彼女の両肩に置いた手はそのままに、カナデの唇に自分のそ  
れを近づける。

「ん……っ！？」

触れると同時に、カナデがぱちくりと目を瞬<sup>しばた</sup>かせた。しかし身体を  
強張らせることはない。その代わりというわけではないだろうけど、  
彼女の体温がどんどん上がっていくのがわかった。

カナデが瞳を閉じる。僕はそれに『黒き魂』を使ったときとは違う、けれどあれよりも抗いがたい　いや、抗おうと思えない衝動を覚え、同じく目を瞑ると、彼女の唇を舌で割り、口の中に忍び込ませた。

「……ふあ、ん……、くう……」

カナデの舌を求めるも、焦らすように口腔をまさぐっていく。

「んあ、ひゃ……、んう……」

カナデもまた、舌を伸ばしてきた。それを包み込むように絡めとる。

ぴちゃ、ぺちゃ、と唾液が混ざり合う音。唇から漏れる甘い声、甘い吐息。少しだけ引こうとした彼女のそれに執拗に舌を絡ませると、カナデは両の手で僕の背中をぎゅっと掴んできた。

「はあ……、ふう、ふああっ……！」

手が僕の背から離れ、バタバタと宙を泳ぎ始める。目を開けて見ると、彼女の頬は真っ赤に染まっていた。けど、それは照れなどの感情の表れではなくて。

「む……、んくっ……、むううっ……！」

あ、そろそろ限界っぽい。

そう判断し、そっと唇を離す。「……ぷはあっ！」と大きく息をするカナデ。



「し、死ぬかと思ったあ……！」

「や、いつも言ってるだろ。窒息死しそうになる前にキスやめていって」

そうじゃないとムードもなくなるし。

「だ、だって、ルウとしてるんだから、一秒でも長くしてたいって思うじゃん。こればかりはしょうがないよ」

そのストレートな物言いに、僕は一瞬言葉に詰まる。

「う……。で、でもなあ。それでもし本当に死んだりしたら、死因、なんて説明しろと？」

「あうう……」

縮こまるカナデ。しかし開き直ったかのように彼女はすぐ胸を張る。

「まあ、でもいまはそれのおかげで止まれたんだから、それはそれでいいじゃん！ ほら、これ以上はここじゃマズイし、子供の目にも毒だしね」

カナデが目で指したのはアリスシアさまたちではなく、噴水を挟んでこちらを見ている年端もいない二人の男女、そしてその付き添いと思われるひとりの兵士だった。

「……って、ユンじゃないか!？」

「や、二人とも。昼間から……じゃないけど、お熱いね。でも外ではほどほどにしておいたほうがいいと思うよ？ それとカナデ、いまのだけで、もう充分に子供には目の毒だったと思う」

「え？ そ、そう？ あはははは……」

「ごまかし笑いを浮かべながら、改めて二人の子供に目を向けるカナデ。

二人はカナデが開いている私塾に通っている子たちで、僕ともそれなりに面識があったりする。確か、目にかかるくらいまで黒髪を伸ばしている男の子はアビエル、茶色い髪をツインテールにしている女の子はライザといったはずだ。年齢はどちらも九歳。

ふと、たたたつ、とアビエルがカナデのところに走り、彼女の服の裾を掴んだ。大方、先生を僕に取られたとか思ったのだろうが、どっこい、取られた感バリバリなのは僕のほうだ。そんなわけで、

「殲滅対象にんて」

「ちょっと！ なに軽々しく『黒き魂』の『力』を使おうとしているの！」

カナデのツツコミが飛んできたが、僕はそれに大声で叫び返す。

「うるさい！ カナデに近寄る男は皆、僕にとって殲滅の対象になるんだ！」

「子供だよ！？ 男である以前に子供で、わたしの教え子だよ！？」

「それでも男であることに変わりはないだろう！ 男なんてなあ、  
一皮剥けば皆ケダモノなんだぞ！」

「うん。とりあえず、カナデと激しくいちゃついていたアルちゃんが  
言っていいことじゃないよね」

ユンのなんと冷静かつ的確なツツコミに、黙らざるをえなくな  
る僕。

その隙についてカナデがアビエルとライザに帰るよう促した。く  
そう、覚えてるよ、アビエル！

子供二人が去り、僕は話の矛先をユンに向けることにした。とい  
つても別に八つ当たりとかじゃない。あくまで正当な文句だ。

「それはそうとユン、僕の未来視、今回はちゃんと当たったぞ。お  
まけにけっこう苦戦もした。ぶっちゃけ『黒き魂』を使うハメにな  
った。更に更に、肝心の誘拐犯は取り逃がした。僕の未来視を信じ  
てお前が一緒に来てくれりゃ、もっとスムーズにいっただろうし、  
取り逃がすこともなかったはずだ。どうしてくれる」

「自分の実力不足を棚に上げての発言はボク、感心しないなあ」

「それはわかってるよ。だからまあ、今度みっちりとお前の流派の  
剣術を叩き込んで欲しいわけなんだが」

「了解。でもさ、アルちゃんの実力不足を棚上げするとしても、『  
今回は当たった』でしょ？ 未来視。必ず当たるとは限らない以上、  
僕もそう軽々しく王宮を離れるわけにはいかないんだよ。ほら、特  
にいまは時期も時期だからね」

時期も時期。それはきつと『祭典計画』のことを指しているのだろつ。

「それもその通りなんだけどさ、それでも、もつとこう……。まあ、いいや。これ以上言っても不毛なだけだし。でもさあ、なんで僕の未来視はこうも精度が低いんだろつな。本当、この精度の低さのせいで何度酷い目に遭つたか……」

「カナデに告白する前に未来視を使つたら、カナデに振られるところを見ちゃって、『こうなつたら、前に進めるよう、告白して玉碎するぞ！』って告白に臨んだこともあつたもんねえ」

あつたあつた。あれはマジで酷かつた。外れてくれてよかったという思いはあつたが、それ以上に『この精度、もうちょっとどうにかならないのか！』と思わず憤つてしまったものだ。

「ああ、それで告白してくれたとき涙目だつたんだ、ルウ」

涙目になってたんだ……。

がつくりと肩を落とす僕。それから、ユンの「とりあえず、雑談はアリスタシアさまたちを王宮まで送りながらにしようか」という提案により、カナデとユンを加えた僕たち五人は歩みを再開した。

「そういえばカナデは不意に抱きつかれるのに慣れてるって言うってたけど、なんで慣れてるの？　というか、誰に抱きつかれても平気なものなの？」

王宮までの帰り道。最初にそう話題を振ったのはユンだった。

「うん？ 知らない人とかルウ以外の男の人に抱きつかれたりしたら、そりゃ、やっぱり平気じゃないよ。それと、不意の抱きつきに慣れてるっていうのは、わたしの妹に抱きつき癖があったから」

「妹がいたんだ！？」

「初耳です……！」

「似てるの？ そっくり？」

驚きの声を上げたのは、僕を除いたユン、アリス、タシアさま、アビゲイルさまの三人。や、僕は前に聞いたことがあったものだから。

「もちろんそっくりだよ、ゲイル。元気で、陽気で。ちょっと身体は弱かったけどね」

や、アビゲイルさまのことを『ゲイル』って。カナデ、なんて失礼な女……。

しかし、そこに突っ込む奴はいないらしく、話はそのまま続いていく。

「あの、『ちょっと身体は弱かった』と仰いましたが、過去形なのは、いまは元気になったから、なのですか？ それとも……」

「後者だよ。妹は九歳のときに死んじゃったから。あ、でもこれが病死じゃなくてね。魔法の暴走による事故なんだ。わたしと違って妹は魔力、強かったから」

「そ、そうでしたの……」

しんみりとした空気が流れる。それを望んでいないカナデは雰囲気  
気を明るくしようと僕に話を振ってきた。

「ルウは？ ルウは兄弟っていた？」

……それ、以前カナデに言ったことあるぞ。

「兄がひとりいるよ。戦いの苦手な、文系の兄上。 ユンは？」

「ボク？ ボクは一人っ子。というか、天涯孤独なんだよね、これ  
でも。剣の師匠のところにお手伝いみたいな感じで下宿させてもら  
えて、おまけに剣も学べたから恵まれてるほうだとは思っけど」

や、全然恵まれてないだろ……。

「で、その師匠がまた陽気な人でね。あと、とんでもないお人好  
しでもあったよ」

「なるほど。お前のお人好し気質は、その師匠譲りなわけだ」

「え？ ボクはお人好しなんかじゃないよ。むしろアルちゃんのほ  
うがお人好しじゃない？」

「それはない！」

「そんな大声で否定しなくても。エピソードとしては……、ほら、  
娼館しょうかんで働いてた娘を身請けして、そのまま自由にしてあげた、みた

いなこと、ない？」

「ないよ！　そもそも娼館に行ったことすらないし！　というか、なにか？　お前はやったのか！？」

「ボクじゃなくて、ボクの師匠がやったんだよ。なんでも友人に無理矢理連れて行かれて軽くイライラしていたところに、いかにも不幸そうな表情をした娘がいたものだから、『幸福でない者を見ていと腹が立つ！　ワシのあずかり知らぬところでならまだしも、ワシの目の前で不幸になどなるな！』って余計に苛立つちゃって、つい勢いで助けてあげちゃったんだって」

「つい勢いで人を一人助けてるのか！　芯からお人好しだな、お前の師匠！」

「その娘、買ってもらった以上は云々かんぬんって言ってただけどね、『お主の幸福がワシの幸福。本当に感謝しているのなら、人並みの幸福を手にし、それを見せに来るがよい』って言って真つ当な働き口を紹介してたよ」

「かけえな、その師匠！　というか、けっこうな年齢の方！？」

「ボクにとつては師匠であると同時に、優しいおじいちゃんでもあったからねえ。まあ、普段はおじいちゃんじゃなくて師匠って呼んでたし、師匠が亡くなってからはボク、修行を兼ねて放浪の旅に出ちゃったから、正直、あまり孝行者ではなかっただろうね」

「したのか、放浪の旅」

「そりゃしたよ。己の剣に磨きをかけるためにね。そういえばその

旅の途中、何度か世界征服や滅亡を企む組織やら輩やらと戦ったなあ」

「何度か世界救ってるのかよ、お前！」

「懐かしいなあ、傀儡戦争<sup>かいらい</sup>」

「懐かしがることじゃないだろ！　というか、冗談だよな！　冗談だと言ってくれ！」

「えー、でもさ。アルちゃんだってカナデだって世界を救ったことくらい何度かあるでしょ？」

あるわけないだろ、一度だって！

そう言ってやりたいのは山々だったのだが。

「まあ、何度かあったけど……」

あるんだよな、これが本当に。そーいやあのエルフたち、いま元気にやってるかなあ。それに、最後には改心したけど、魔王復活を企んでいたあいつ、ちゃんと真つ当な人生を送ってるかなあ……。

しかし、いくらなんでもカナデにはないだろう、こんな経験。そう思って彼女のほうに顔を向ける。そういえば彼女の妹に関すること以外は、あまり聞いてないんだよなあ、なんて思いつつ。

対するカナデの反応は。

「ああ、あったあった。それはもう数え切れなくらいあったよ。世界救ったこと」



「マジですか。」

「一番印象深かったのはあれだね、『第二研究所炎上事件』。

えっとね、第二研究所で行われていた研究っていうのがさ、特殊な魔法陣を用いて、とある宝玉と世界そのものをリンクさせるっていうものだったんだけど、そこで爆発が起こって火事が起きちゃったから、さあ大変」

「それは、マジで大変そうだな……。つまりはあれだろ？ 研究所の消滅はイコールで世界の消滅に繋がるという」

「まあ、いま考えたでっちあげの事件だけだね！ 実際は悩んでいる人の相談に何度か乗ってあげた過去があるってだけ」

な、なんだ嘘かよ……。てっきり本当に何度となく世界レベルの危機を救ったことがあるのかとばかり。

不意に、ほう、とアリスタシアさまが感嘆の息をついた。

「こうして聞いていると、割と誰にでもできることなのですね、世界を救うというのは」

「いえ、それは違うと思」

「そうだよ、アリス」

僕のツツコミはカナデに遮られた。というか『アリス』って、また失礼な……。

「世界を救うっていうのはね、人を一人救うっていうこととイコールなんだから。十人の人を助ければ、当然、十回世界を救ったことになるんだよ。『精神世界』っていう言葉が存在しているのがその証拠」

それは違うだろう、と突っ込んでやりたいものの、そうキツパリと言われるとなにも言い返せなくなる。

「そんな風に世界を何度も救ってきたわたしから、ルウとユンユンにアドバイス！」

負の感情はなるべく、負の感情として取り入れないようにしたほうがいいよ。それは人間として生きていく上での基本にして究極だからね。

そして、仮に負の感情を取り入れてしまったとしても、あまり溜め込まないこと。できる限り速やかに吐き出すように。

だって、負の感情に、同じ負の感情を以って臨んでも、そこには争いしか生まれないからね。わかった？」

ぴっ！ と人差し指を立ててみせるカナデ。僕とユンはそれに黙ってうなずいた。

「うん、よろしい！」

そう言ってカナデは偉そうに胸を張る。

そんな彼女を見ながら、ふと思った。

この世界にやってきたばかりの頃。『黒き魂』に『吞まれ』た僕を正気に戻すことができたのは、きっとカナデがこういう考えの持ち主だったからなのだろう。そして僕が彼女を好きになった理由も、きっと。

それからも他愛のない話を僕たちは続けた。アリス・タシアさまたちを含め、もっと話していたくて道端で立ち止まったりもしながら、ゆっくりと王宮を目指す。

結局、姫たちを王宮に送り届け終わったのは、あたりがすっかり暗闇に包まれてからのことになってしまった。

街の高級住宅街にある一軒家。

そこに住む少女　ライザは夕方に見たルアルドとカナデのキスシーン（それもディープな！）を思い出し、顔を真っ赤にしていた。まさか、ややもすると男勝りな印象さえ受ける、あの姉に恋人ができていたとは、と。

そう、彼女の姓はリーゼンフォード。ライザ・リーゼンフォード。元の世界ではカナデの妹として存在していた、転生型来訪者だった。

波紋の広がることのない、けれど波ある心を持っていたいと彼女は願う（後書き）

作者：ルーラー

斯くも幼き双つのシカイに映る偽りの世界は、斯様に儚く輝きます

黒く潮の匂いを湛える空気の中に、幼き少女と少年が立っていた。巷で評判が上がり始めている球体関節人形のように見目麗しい容姿であり、その表情も無機質で凝り固まったものという様子である。ふくらみ始めたばかりの乳房や、絢爛豪華な衣装ですら人形そのもののようで、それこそ人形そのもののような、絵画から出てきた貴族のような風貌である。

対照的に少年の方かというと、何年も使い込んだような灰色の布を頭から被り、その顔は一切見えない。少女が体格の良い美人であるとするれば、少年は痩せ細り身長も少女に比べて頭一回り小さかった。恐らく同じ年代の少年達と比べても著しく小さいその背丈は、少年がまともな食事をしてこなかったことを表しているのかもしれない。

そして少女と少年は、服装さえなければ見紛うほどよく似通っていた。

二人は海岸に並び、遠き海を只管に眺めていた。少女は艶やかな髪が傷むことを気にもせず、少年は少女と共にいるために集まる視線を気にもせず。もし此処に画家がいたのなら、そんな二人のことを画かすにはいらなかっただろう。それは如何にも油彩画じみた構図であつたし、何よりどんな兄弟姉妹よりも互いに互いの特徴を映しあつたような顔をした彼らの他に刺激的な題材があるはずもない。

然し此処には画家はいなかったし、たとえいたとしても画くことは躊躇われただろう。貴族然とした少女と奴隸風の少年を共に描くことは無礼であるし、許可を取れる様な柔らかい表情を二人が二人

とも浮かべていなかったというのもある。

少女と少年は身じろぎひとつしない。はたはたと、服だけがアドルナ海から吹き寄せる潮風にゆらめいている。その退屈な見世物に、集っていた観客達も散り散りになっていく。

少年が口を開いた。

「死んじやったね」

「……」

少女は答えなかった。二人の間に再びの沈黙が落ちる。

「残ったのは、君と僕の二人だけだよ……。君や君のお父さんが、君のお父さんの息子を快く思っていなかったとしても、そんなことは関係ないんだ。君のお父さんの力で君のお父さんの息子が隠されていたのはもう、過去のことなんだから……」

「……」

「きつと僕は、リーゼンフォードに追われる。そもそもこれまで予知能力者に見つからなかったのがおかしかったんだ。明日にでも僕はリーゼンフォード姓になるだろうね。転生なんて 本当、するものじゃない……」

「……」

「だけど僕はそれを否定する。お父さんもお母さんもお爺ちゃんもお婆ちゃんも親族丸ごと失った君に同情して、僕はこの姓のままでいたいと思う。たとえリーゼンフォードに追われることになったとしても」

少女の耳が、ぴくりと動いた。ギギギ、そんな擬音を挟んで、少女の顔が少年へと向いた。

「……それでは、あなたが殺されてしまうわ。リーゼンフォードでない渡来者は、身分を保証されないの」

少年はぎこちない、頬の筋肉が引き攣るような微笑を浮かべて言う。

「それでも構わないよ。墓石に、君と同じ名を刻めるのならば……」

少女は何も答えなかった。顔は先程までのように能面に戻り、視線も広がるアドリア海に固定されている。少年も何も言わなかった。ぱしゃ、ぱしゃと海岸に打ち付ける波だけが微かな音を立てている。日は沈み、街も静まる。アドリア海に面するこの街も、まもなく今日という一日を終えようとしている。それでもこの二人だけはそこに立ち尽くし、ただ海だけを見つめ続けている。別れを惜しむ親友であるかのように。

周囲から、声はかからない。いつの間にか、あたりには人っ子一人見えなくなっていた。この街では地形的に強い結界を張ることが出来ないため、夜間はしばしば魔物がでる。その被害に遭わないために街の人々は日暮れと共に家にこもる。そこにいる二人を置き去りにして。

少女と少年はいつまでも海を、あるいは海の先にあるアズファードを見ていたのかもしれない。

そんな二人の空気を壊したのは、陽気そうな二人の声だった。「ったくよー、どうして俺がこんなところにいなくちゃなんねーんだよ……。こんな仕事、下っ端どもにやらせりゃいいだろうが……」  
「あなたがボードゲームばかりやっているからでしょう……。相方の私まで評価が下がるのは心外ですので以後やめていただけると助かります」

「ああはいはい、俺が悪かったですよ……。ところで坊主たちは、こんなところで何をしているんだ？」

唐突だった。

少女と少年の背後に、男と女が立っていた。橙色の髪を盛大に撥ね上げ見た目だけで重そうだとわかるナップザックを持った男と、絹糸と見紛うばかりに細い髪を撫でつけ腰にスラリと長い長剣を挿している女性。違和感のあるその服装は随分と古びていて、彼らがこちらに来てから長期間、リーゼンフォードに属していないことを示していた。

そして彼らの来訪と同時に

街の空気が　ざわめいた。

それはかつて、戦争の便りが街に届いたときの反応に似ていた。勿論、長く平和なこの街にそのことを知る者など最早残ってはいない。ざわめきは次第に大きなうねりとなって、街全体を覆い尽くしていく。

次第にあちこちらから、「祭りだ！」「祭りだ！」という声が聞こえてくるようになるまで、さほど時間はかからなかった。

「ところで、嬢ちゃん坊ちゃんはこんなところで何をしているんだ？　この辺は結界が甘いからさっさと家に入れよ」

その言葉に、少年はぴくりと肩を動かし、少女はまったく動かなかった。その反応に男は不満そうに眉を顰めると、ぷいと顔を背ける。代わりに女性が言った。

「ああ、ごめんなさいね……。この人気に入らないとすぐこうだから……。……見たところ、男の子の方は渡来人みたいだけど、その格好だとリーゼンフォード姓じゃないわね……。だったら今は中央には行かないほうがいいわよ。これから”お祭り”が始まるみたいだから、リーゼンフォード姓の人も増えて大変だから。私たちもそれから逃げてきたんだけど……。もつとも、これからリーゼンフォードになるって言うなら話は別だけれど……。……」

「……あ、……。ありがとうございます……。でも、なるつもりは……。……」

「ちっ、しゃべれるんじゃないか！　だったらさっさと会話すりゃあいいんだよ、会話すればよ！」

「ヤスクノフ！　もうちよつと言い方はないの？」

ぴしゃりと叱り飛ばす女性に対して、ヤスクノフと呼ばれた男性は再び顔を背ける。女性は再び微笑を浮かべると少年に向き直る。

「それで……。よかつたらただけど私たちと一緒に来る？　少なくとも、リーゼンフォードに入る気のない君はこっちのほうが安全だと思うけど」

「……行きません。結構です」



少女の声は冷たかった。少年はそれに顔を振って追従する。

「そう、なら何をするのもいいけど頑張ってね。あ、名前……、教えてもらってもいい？」

「……」

名前を尋ねられて、少女は沈黙した。

「彼女の名前は……、パメラって言います。……僕はディルク」

「！？」

「……？」

「……？」

少年が少女の名を口にした瞬間、二人は少しだけ身じろぎした。

然し二人ともすぐに普段どおりの顔に戻ると、ヤスクノフはポケットに手突っ込んで、小さく白い陶器のようなものを取り出した。それを女性が受け取って、少女に差し出す。

「そう……、私はトールスって言うの。それで、もしんだけど、この先リナ・エンドウっていう人に会ったらこれを渡してくれないかしら、パメラちゃん。もちろん、無理に会いに行けなんていうつもりはないんだけど」

トールスはそこで一度言葉を切ると、じっとパメラの目を見つめて言った。

「そうすればきっと、あなたがどうして渡来者じゃないか、その理由もわかるわ」

パメラは首を傾げ、

「………、きつと………？」

傾げた首を戻して言った。

「なら……、いい」

それを聞いたディルクが、恭しく礼をした。

こうして、幼き少女と少年の旅は密かに幕を上げた。二人は最後まで気づかなかったが、奇しくもその日は聖女「リナ・エンドウ」の来訪日その日であった。



斯くも幼き双つのシカイに映る偽りの世界は、  
斯様に儚く輝きます（後書き）

作者：るっぴい

二人のミーナは偶然出逢い、そしてそれを必然に変える

少女と、その母親が、歩いていた。

少女は突然足を止め、車道に出る。

母親は気づかず、歩き続けている。

大型のトラックが少女に迫る。

少女は、それをただ見つめていた。

声も上げずに、ただじつと見つめていた。

「ミーナ！！」

母親が、異変に気づき声を上げる。

しかし、少女は動かなかった。

何かに操られたかのように、立っていた。

次の瞬間、彼女の体は中を舞った。そして、離れたところへ落ちる。

「ミーナッ！！」

母親が少女に駆け寄る。

トラックの運転手も、少女の元へ走ってくる。

それを見た住人達が、次々と家から出て、少女の周りに人だかりを作る。そして、少女に声をかける。

それでも、少女は動かなかった。

「ミーナ……」

少女の魂は、この世界から、消えてしまった。

気づくと、そこは彼女が今までいた場所ではなくなっていた。

「何……ここ、何処……？」

そこは、何も無い広い草原だった。

「どうして私こんなところにいるの……？」

「あら、貴女トリッパ―の人？」

「！あ、あのっ、私っ……」

「トリッパ―で間違いなさそうね」

「と、とりっぱ―？」

「そう、トリッパ―。異世界からこの世界に渡来してきたひとたちのことよ」

「それが、私なの？」

「そうよ。貴女、名前は？」

「ミーナ……。ミーナ・フィルスです」

「あら、私と同じ名前だわ」

「え？ 貴女もミーナっていう名前なの！？」

「ええ。私はミーナ・アウラトス」

「“アウラトス”って、“黄金の”っていう意味の？」

「その通り」

女性がやわらかく微笑む。

「同じ名前なのも、何か縁があるのかもしれないわね」

「あ、そうだ。ミーナさん」

「何？」

「どうすれば、私はもとの世界に戻ることができるの？」

「……」

「？」

「無理に近いわよ」

「えっ！？ な、何で！？」

「貴女がトリップしてきた原因、何だった？」

「えっと……、あれ？ 何だっけ……？ でも、事故だった気がする……」

「……」

「そ。貴女は、交通事故がきっかけで、この世界に渡来してきたの。そして、貴女が元々いた世界では、貴女は亡くなったことになって

いるの」

「そんな……」

「でも、まだ可能性はあるわ」

「え……。良かったぁ……！」

「事実かどうかはわからないけれど、ね」

「それって……」

「風の噂ってとこかしら」

「それでも、それが本当なら、私は戻れるの？」

「そうよ。本当だったら、戻れるわ」

「どんなことをすればいいの？」

「少し落ち着いて。まずは、お祭り会場へいきましょう」

「お祭り会場？」

「そう。そこで、リーゼンフォード一族の方に、貴女がトリッパ―だつてことを報告してこなきゃならないの」

「よくわからないけど、そうしなきゃならないのね」

「そうよ。だから行きましょう」

女性が少女を促す。

「はいっ」

二人は、お祭り会場へと足を進めた。

二人が辿り着いたのは、祭典が開かれ、とても賑わっていた。

「着いたわ。ここよ」

「わぁ……」

「リーゼンフォード一族の方は何処にいらっしゃるかしら……」

「本部とかにいませんか……」

「そうね。試しに行ってみましょうか」

「はいっ！」

少し歩くと、祭典の本部が見えてきた。

「あそこね」

「ちよつと見てくるわ。リーゼンフォード一族の方がいらっしゃつたら、貴女のことを報告しておくから、待っていてくれる？」

「わかった！」

「じゃ、行つて来るわね」

「はい」

少女は、小さな小屋に入っていく女性の背中を見送り、その場にしゃがみこむ。

（なんか、大変なことになっちゃったなあ……。これからどうすればいいんだろう……）

少女の周りをたくさんの人々が通り過ぎてゆく。

（つていうか、なんで私がこんな目に遭わなきゃなんないのよ……）

遠くの方で、笛の音色が聴こえてくる。

（そもそも私がこつちの世界に来た原因……。あの事故のときの記憶が曖昧なのはなんで？）

少女は空を見上げる。

（あの時どうして車道にでたんだろ、私……。思い出せないや……）

「ミーナちゃん、お待たせ」

「あつ、ミーナさん！！どうでしたか？」

「リーゼンフォード一族の方のこと？」

「はいっ」

「それなら大丈夫。貴女がトリッパーだってこと、ちゃんと報告してきたわ」

「それで、これから私はどうすればいいの？」

「そうねえ……。急がなきゃ、あなたの“身体”が貴女の元々いた世界から無くなってしまうものね」

「……あの、その私の体が無くなるっていうのが、イマイチしつくりこないんですが……」

「ああ、詳しく説明していなかったわね、それについて」

少し考えるそぶりを見せてから、女性は、話し始めた。

「まず、貴女のいた世界では、もし人が亡くなったら、どうしてる？」

「えっと……。お墓に入る……?」

「その前に、なにかするでしょう?」

「え……。?あ、お葬式……」

「そう。そのときに、遺体を火葬してしまうでしょう?」

「……!」

少女は何かを悟り、黙り込む。

「それが、“身体”が無くなるってことよ」

「そんな……。だったら、本当に時間が無くなっちゃうんじゃない!」

「だから、急がなきゃならないの」

「どうすれば、戻れるの!?」

「……戻れる可能性は、ゼロに近いわよ」

「そんなあ……」

「ひとつだけ、方法があるけれど、風の噂だし、成功するかも、事実なのかも分からないのよ……」

「それが本当なら、戻れるんでしょ!?さっきもそう言ってたじゃない!」

「本当なら、だからね?」

「じゃあ、やってみようよ!ー!やらないのよりは、マシでしょ?」

「そうね。やるだけやってみましようか」

その言葉に、少女は頷いた。

「それじゃ、行くわよ。ついて来てね」

「行ってくて、何処へ?」

「西の森に」

「どうして?」

「そこへいけば、戻れるかもしれないというのが、風の噂の内容だからよ」

「!ー!」

「ついてこれるわね?」

「はいっ!ー!」



二人は、西の森へと足を進めた。

その途中で、少女は、こんなことを呟いた。

「もし戻れなかったとしても、ミーナさんと一緒なら、大丈夫かもしれないな……」

「んー？何か言ったー？」

「あ、な、何でもないですっ！」

「そう。じゃ、行くわよー」

「はいっ！」

数時間が過ぎた。

「着いたわ、ここよ」

「ここが西の森……。これで、私は戻れるの？」

「わからないわ。けれど、やるだけやってみるんでしょう？」

「はいっ！」

二人のミーナは、西の森へと姿を消した。

二人のミナは偶然出逢い、そしてそれを必然に変える（後書き）

作者：にゃー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8175k/>

---

【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

2011年10月30日14時58分発行